

# 釜北小学校 事件簿

探偵は小学生



内田芳邦

# 目次

目次	1
第一章 『戦闘中』	1
第二章 銀行強盗	12
第三章 冬 少年レイ	25
第四章 『逃走中』	41
第五章 郵便局強盗	53
疑わしきは罰せず	
グラウンドをさまよう魂	
ハンターはハンニン（犯人）	
犯人の背中を押したマキ	

# 目次

第一章 『戦闘中』	p.14
第二章 『銀行強盗』	
第三章 『少年レイ グラウンドをさまよう魂』	p.30

# 第一章 『戦闘中』 外来語には注意を

第一章 『戦闘中』 外来語には注意を

七月十五日、月曜日。快晴。

街のあちこちからシャシャシャとクマゼミの大合唱がわきあがる。朝から暑い。今日も気温は真夏日にまであがるらしい。トオルと妹の美加は重いランドセルを背負って家を出た。あと五日で夏休みだ。

夏休み前の一週間、学校は半日で授業は四時限になる。あとは給食を食べて、そうじをして『帰りの会』が終われば、みんな下校になる。だけど、五年生のトオルと達也は児童会の用事があったので少し遅れて学校を出た。二人が水滝公園の角にさしかかったとき、公園の入り口から美加が勢い込んで走り出て来た。

「兄ちゃん。鉄棒で逆上がりやってたらおカネが落ちてた。交番に届けないと…」  
興奮して、美加は握った手をひらいた。広げた手のひらには百円玉がひとつのっている。

「百円？ 鉄棒の下に…だれか、鉄棒やってポケットから落ちちゃったんだな」  
トオルは達也を見た。達也は美加の肩をたたく。

「ラッキーだったじゃん。もらっとけば」  
「ダメだよ。届けなきゃ」

美加が声を強めると、今度は真面目くさった顔でからかった。

「えらい。美加。その通りだ。たとえ百円でも届けないとドロボーにされて逮捕されるぞ」

「えっ、うそ？」

「じゃあ、ここだな」

達也は笑いながら二人に手を振ると、角を曲がって帰って行った。

「だけど、百円なんて、落とした子、交番に届けるかな？」

トオルは首をかしげながら、しぶしぶ美加のあとについて交番へ行った。新しくできた水滝交番のおまわりさんは若くて、まだ勤めはじめのようだった。

「ほう、えらいなァ。よく届けてくれたね。感心、感心」

おまわりさんは、にこにこ笑って百円玉を受け取るとスチールのデスクの上に置き、その横にあったメモ用紙とボールペンを手に取った。

「ええと、名前は美加さん。福沢の美加さん。釜氷北部小学校二年。お金が落ちていた場所は水滝公園の鉄棒の下…と。落とし主が現れるといいけどね」

それから、おまわりさんは上着の内ポケットに手をやり財布を出すと中をのぞいて百円玉をひとつ取り出し、美加の前に差し出した。

「はい。これは届けてくれたお札」

「え？」

美加は、わけがわからず振り返ってトオルを見たが、おまわりさんが

「ははは、だいじょうぶだよ。これは美加さんが拾った百円玉じゃなくて、届けてくれた美加さんへのおまわりさんからのお札だから。はい」

と、また言うので、もじもじしながら受け取った。

「ええと、キミは」

「美加の兄です。福沢トオルです」

「福沢…トオル…？」

おまわりさんは、トオルの顔をまじまじと見た。

「もしかしたらキミか？ 先日、郵便局で大活躍だったという少年は」

「え？ はい。いえ。あれは大活躍なんかじゃなくて…」

数日前、ママに頼まれて郵便局へ速達を出しに行ったときのことだ。駐車場の片すみの自転車置き場に自転車をどめて入口へ向かって歩いてみると、目の前に大きな黒いクルマが止まった。後部座席のサイドドアが開いて、知らない男の人に続いて降りてきたのが幼稚園児の頃から親しくしてきた近所の爺ちゃんだったのでトオルはびっくりした。爺ちゃんは、先に降りた男に連れられて入り口からATMコーナーの方に歩いて行く。最近、認知症が出てきたみたいで…と婆ちゃんが心配していたことを思い出したトオルは、追いかけて声をかけた。

振り向いた爺ちゃんは「…ああ？ ……あ、トオルちゃんか」と、なんだか弱々しい声で不安そうにトオルを見たが、そのまま男と一緒に一番奥のATMの仕切りの中へ入って行った。(やばっ。詐欺だ)。トオルは、あわてて中の郵便局員に連絡した。

郵便局員が男を問い詰めていると、男はいきなり局員を突き飛ばして逃げトオルにぶつかった。倒されながら(頭を打つとやばい)と思ったトオルは、とっさに男の足にしがみついた。男はバランスを崩し「わっ」と叫んで転倒した。ゴン。音がした。床に頭を打ちつけたようで「ぐ…」と、うめいて動かない。それを見て、仲間はクルマを急発進させて逃走したが、倒れた男は郵便局員に取り押さえられ、通報を受けて駆けつけたパトカーの警官に引き渡された。この事件のことが翌日には友だちにも先生にも知れ渡り、トオルは小学校でちょっとした有名人になった。

おまわりさんは、うれしそうにトオルを見て笑った。

「そうか、キミだったか。ははは、見事なタックルを決めたそうじゃないか」

「え？ いえ、あれは…」

「ははは、ま、なんにしても、あの爺ちゃん、被害にあわなくてよかった。お手柄だよ。トオル君」

「いえ、爺ちゃんが心配で…夢中で…」

「そうかね…ま、よかった。ところで、私は、今度、ここの交番に勤務することになった巡査で高下駄正『たかげた・ただし』といえます。また、なにかあったら、いつでも連絡してください」

七月十六日、火曜日。快晴。

一時間目が終わり、担任の雄太先生が教室を出ていくと、トオルは廊下から名前を呼ばれた。廊下には、背のすらっとした女の子と体のがっちりした女の子が待っていた。二人とも見おぼえがある。(そうか)と、トオルは思い出した。背のすらっとした方は運動会で赤組の副団長をやっていた六年生で、メチャッコいいと五年男子だけでなく女子の間でも話題になっていた。名前は、確か…水島マキ。そのマキが、なにか珍しいものでも発見したような目つきで頭のとっぺんから足のつま先までじろじろ見るので、トオルはどぎまぎした。

「ふーん…郵便局で犯人を取り押さえた少年って、キミなの？ ……案外ふつうね」

マキは少しがっかりしたように言い、隣にいるがっちりした子もうなずく。ムツとしてトオルはマキ

をにらんだが、マキは気にする様子もなくトオルの顔を見返した。

「学校が終わったら、ちょっとつき合ってくれら」

「え？ つ、つき合うって、デートですか」

「ち、違う！ ちょっとハナシがあるの。場所は水滝公園。いい？」

「あ、はい」

声を荒げたマキの剣幕に圧倒されたトオルは反射的にうなずいた。それから、二人は六年生の水島マキと山下ミサだと名乗ると、「じゃあ、公園で」と言って引きあげていった。

二時間目は算数だったが、ぜんぜん集中できなかった。なんだろ？ ハナシって。郵便局で犯人を取り押さえたのはキミなの？ と、水島マキは聞いた。てことは、なにか事件だな。マキの身になにか事件が起きてトオルのところに相談に来た。そんなふうを考えていたら、トオルの妄想はどんどんふくらんでいった。いったい、どんな事件だろ？ 殺人事件？ まさか。ははは、それはない。あるはずがない。

学校が終わり、走って帰宅したトオルは玄関にランドセルを放り込むと、隣の居間で『サザエさん』の録画を観ている妹に「水滝公園へ行ってくる」と声をかけた。

公園には、すでにマキとミサ、そしてもうひとり知らない女の子が待っていた。

「この子は同じクラスの池上ヒナ、この子の兄ちゃんのことと相談だよ」

と、マキが紹介し、池上ヒナは「よろしく」と軽く頭を下げた。マキは家から持ち出したスマホでニュースを表示し、トオルに見せた。

六月十七日（月）、午前二時四十分頃。釜氷市四谷町のコンビニで客をよそおった男二人がアルバイト店員（21）に刃物を見せて「金を出せ」と脅し、現金二十三万円を奪うとクルマで逃げた。当時、店に客はおらず店員にケガはなかった。防犯カメラの映像によれば、逃げた男は身長170センチくらいのやせ形と180センチくらいのがっちり形で、二人とも黒っぽい服装でフードをかぶり、黒のマスクにサングラスを着用していた。なお、店員によると、「金を出せ」の発音がゆっくりで外国人風に聞こえ、また、男二人は英語で会話をしていたとのこと。

「この店員というのが、この子の兄ちゃんなの。大学生でアルバイト」

と、マキがつけ加えた。

（え？ コンビニ強盗）トオルは、がっかりして池上ヒナを見た。

「兄ちゃんにケガがなくてよかったね。ま、こんなの、そのうち捕まるでしょ」

「うん、ケガはなかったし、とられたお金も兄ちゃんが弁償しないといけないってことではないけど、なにもしないで言われるままにお金を渡したことで、兄ちゃんは責任を感じ、すっかり落ち込んでるんだ。警察が早く犯人を捕まえるといいんだけど、なかなか捕まらないし、もう一か月になるの。このままでは、兄ちゃんがかわいそうで……で、マキに話したら、『なんか、五年生に探偵みたいな子がいるらしいよ。その子に相談するといいかもしれない』って言われて……」

探偵みたいな子とか、相談するのいいとかマキに言われた、と聞いて気分を良くしたトオルは思わず背筋を伸ばした。そして、マキのスマホを手にとると画面にタッチした。コンビニ強盗のニュースが表示される。もう一度ぎっと目を通したトオルは、最後の部分を口に出して読んだ。「男二人は英語で会話をしていた」。それから「うーん」と、うなって「なんか、ちょっと変だな」とつぶやいた。マキとヒナ

がトオルの顔を見る。

「変だな、って？ どこが」

「犯人二人が会話していたっていうところ。どんな会話かな？」

「どんな会話？」

「犯人って、ふつう犯行現場で仲間に、あれこれ指示は出し合っても会話はしないんじゃないかな。だから、会話ってどんな会話かなと思って」

「犯行現場で犯人同士は会話しらない？」

「うん、犯人が二人とか三人とかの場合、ふつう、会話なんかしない。声を聞かれると犯人を見つかる手になりかね。映画なんかで、強盗が犯行現場で会話しているって見たことない。何もしゃべらず、手つきや目つきで合図し合う」

「ふーん。なるほどね。さすが」

と、腕組みしたマキはうなずき、池上ヒナの顔を見た。

「犯人二人が英語で話した会話って、なんだかわかる？」

「あ、それ？ ええと、兄ちゃん、なんか言ってたけど、ちょっと、ハッキリ覚えてないなア。もう一度、確かめて、あした学校で知らせるよ」

トオルはつけ加えた。

「あ、それと、『カネを出せ』の発音が、どんなふうだったかも、できるだけ詳しく聞いてきてほしい。あと英語の発音もね」

翌日、一時間目の放課に、池上ヒナがマキとミサに付きそわれてやって来て廊下からトオルを呼んだ。池上ヒナが報告する。

「どんな会話だったか、ってことだけど……犯人の一人が何度もクシャミをしていたので、もう一方が、『アー・ユー・オーケー？』、だいじょうぶ？ と聞いて、クシャミした方が『アィム・ファイン。アィ・ハブ・アレルギー』。つまり、だいじょうぶだ。おれ、アレルギーなんだ、って言ったんだって」

「え？ 強盗してる最中に何度もクシャミ？ で、相棒が『アー・ユー・オーケー？』と聞いて、クシャミした方が『おれ、アレルギーなんだ』と答えた。ふーん。じゃあ、『カネを出せ』の発音のほうは？」

「カネ・ヲ・ダ・セ、みたいに、音を一つ一つ区切って強くゆっくり発音したんだって」

「一つ一つ音を区切って」と、トオルはヒナの言った言葉をくり返し、考え込んだ。

「ああ、それと、英語の発音のことをキミから質問されて、兄ちゃんに思い出してもらったんだけど、英語の発音の方も、なんとなくゆっくりで聞き取りやすかったって」

「英語も、ゆっくりで聞き取りやすかった？ ふーん、なるほど」

マキとミサがトオルの顔を見る。

「なんか、わかった？」

「いや、まだ、なんにも」

二時間目の始まりのチャイムが鳴った。

「じゃあ、きょうの授業後、水滝公園集合ってことで」

と言って、トオルは教室にもどった。

雄太先生がやってきて教室の教壇に立った。「起立」と日直の号令でみんな立ちあがる。「今から国語の勉強を始めます。お願いします」と日直が声をあげ、「お願いします」と全員で声をあわせる。そして、「着席」の声で座った。

黒板にチョークで外来語と書いてから、雄太先生は説明を始めた。

「前の授業で和語と漢語について勉強したが、みんな、覚えているかな」

雄太先生は、ぐるりとみんなを見まわしてから達也を指名した。

「達也、和語と漢語について説明してくれるか。座ったままでいい」

「はい」と、返事をして達也は得意そうに答える。

「和語は、もともと日本にあった言葉で海とか桜とかです。漢語は古い時代に中国から日本に入ってきた言葉で、ええと、銅とか肉とか」

うしろの席の健太がイスから腰を浮かして達也の背中越しに前をのぞき込む。そして、「教科書見て言ってるだけじゃん」と、けなした。達也がうしろをふり返って「いいだろ、別に」と言い返す。

先生は二人の言い争いは無視して、黒板に書いた外来語という字の横をチョークでたたいた。

「きょうは外来語について勉強する。外来語というのは、漢語以外の外国から入ってきた言葉だ。たとえば、パン。パンは何語かな？」

「パン？ 英語じゃないの？」

「英語じゃない。ポルトガル語だ。スペイン語もパンだ。じゃあ、英語でパンはなんというのかな」

「え？ ……」

と、みんなは顔を見合わせる。

「ブレッド」

と、帰国子女の女の子が遠慮がちに言う。

「そう。英語でパンのことはブレッドだよ。じゃあ、ランドセルは？」

教室のあちこちから声がある。

「えっ、ランドセル？ ……ランドセルは英語じゃないの？」

雄太先生は、笑顔で声の上の方を順に見てから口を開いた。

「英語じゃないんだよ。オランダ語。それに、カバンもリュックサックもオランダ語」

「ええーっ？」

「今は、英語が世界の共通語になっていて、国際的な会議では各国の代表が英語で話すことが多いから、われわれは、なんとなく、カタカナで書かれた外来語は、みな英語かなと思ってしまうけど、実は違うんだよね。では、教科書の表を見てみよう」

教科書の中の表には、英語、フランス語、ドイツ語、ポルトガル語・オランダ語からの外来語がそれぞれ三箇所ずつのっている。

「ええーっ、カルタ、カステラがポルトガル語？」とか「あっ、マヨネーズってフランス語なんだ」

とか「へえ…ガーゼがドイツ語」とか、あちこちで驚いた声がある。先生が説明を続ける。

「外来語というのは、ヨーロッパの国々やアメリカから入ってきた言葉だ。ただし、今と違って、イン

ターネットもテレビもない時代のことだから、言葉だけが日本へ入ってくるってことはあり得ないわけで、外国の言葉が日本に伝わるといことは、その言葉を話す人々が日本にやってきて日本人と交流したり貿易したりしたことなんだ。わかるか？」

「はあーい」

「だけど、それまでの日本に無い物や事がら、つまり当時の日本人が初めて見る物や聞く物は、それを表す日本語がないわけだから、相手の発音を聞いてカタカナで表したんだよ。ま、相手の発音を正確に聞き取れたかどうかは別にして、聞こえたと思ったようにカタカナで表したんだ。たとえば、パン。そんなもの、それまでの日本になくて、日本人はポルトガル人のパンを初めて見て食べて、ああ、この食べ物『パン』というんだ、みたいに」

「ふーん」

「おもしろいのは、一つの物の呼び方を日本人は二か国からの外来語で使い分けている場合があるということだ。『ビール』はオランダ語で、英語では『ビア』だが、日本人はどちらも使う。『ビールください』という時はビールで、『ビア・ガーデンへ行こうか』の場合はビアだ。これは、ビールを日本に最初に持ち込んだのは江戸時代はじめてのオランダ人だが、ビア・ガーデンを日本で最初に始めたのが明治時代のアメリカ人だからだ。うん、そういうえば、以前こんなことがあったな。海外旅行から帰国した直後、先生がレストランで料理を注文したあと、うっかり、『それとビアもね』と、言ったら、ウェイトレスに『ビールですね』と訂正された。はははは」

ビール好きな雄太先生は、小学生相手に得意になってビールの話をしている。トオルは、みんなと同じように「はははは」と、少しだけ、おあいそ笑いをしてから教科書に目をやった。

「ん？ エネルギーはドイツ語？ へえ…英語じゃないんだ」

ふと思いついたトオルは、手をあげイスから立ちあがった。

「先生、質問！」

ビールの話をさえぎられて、先生はハッと正気に返った。

「なに、質問。トオルが？ 珍しいな」

トオルはちょっとムツとしたけれど、そこはスルーした。

「先生、エネルギーはドイツ語って教科書に書いてあるけど、アレルギーは何語ですか」

「おお、いい質問だな。アレルギーもドイツ語だ」

「じゃあ、アレルギーは英語で何というんですか」

「アラジード。エネルギーの英語はエナジー」

「アラジード？ …なるほど。ということは…そうか」

「ということは…そうか、って、おまえ、どうかしたか？」

「いえ、なんでもありません」

授業後、トオルとマキとミサとヒナは水滝公園に集合した。

「で、その後の捜査の進展は？」

と、マキがトオルに聞く。まるで、警察署長が部下の刑事に質問するかのようだ。

「うん。犯人は英語を話す外国人じゃないかもしれない」

「えっ、違うの？」

「いや、まだ、そうと決まったわけじゃないけど。違うかもしれない」

ヒナが不服そうな顔をトオルに向ける。

「だけど、兄ちゃんは英語を話す外国人だって……」

「うん。犯人の一人が『おれ、アレルギーなんだ』と英語で言ったことだけど、アレルギーは英語じゃない。もともとはドイツ語で、ドイツから日本に入ってきた外来語。つまり、ほぼ日本語」

「ええっ、アレルギーって、ドイツから入ってきた外来語で、ほぼ日本語？」

と、三人が驚きの声を上げる。

「今日の国語の授業は外来語についてだったんだけど、雄太先生によると、ドイツ語の『アレルギー』を英語で言う『アラジー』だって。だから、もし犯人が『アラジー』じゃなくて『アレルギー』と確かに発音したのなら、この英会話はとても怪しい」

「とても怪しい？」

三人はトオルを見つめる。

「うん、二人の犯人の会話の『アー・ユー・オーケー？』と『アイム・ファイン。アイ・ハブ・アレルギー』のうち、アレルギー以外は英語だから、この英会話にはドイツ語からの外来語、つまり、ほぼ日本語が混ざっている」

「ふーん。で、だから？」と、ミサがトオルをせかす。

「うん。犯人たちの英会話は、外来語の日本語が混ざったものだから、犯人は英語を話す外国人ではなく、英語を話す外国人のふりをした日本人の可能性が高いってこと。犯人は外国人の犯行に見せようとして、店員の前で、わざと英語で会話したんだけど、『アレルギー』が英語じゃないということを知らなかった。英語を話す外国人なら、『アレルギー』でなく『アラジー』と言わなきゃいけない」

「あ、そういうこと……」

「そう考えると、『カ・ネ・ヲ・ダ・セ』の片言の日本語も怪しい。外国人に思わせようと、わざと、ぎこちなく発音したのかもしれない」

「わざと、ぎこちなく発音……」

「警察が、もしも、英語を話す外国人の犯行だという池上さんの兄ちゃんの証言にとらわれているとすれば、捜査の範囲をずいぶん狭めていることになる。まあ、そんなことはないと思うけど……この程度の事件が一月以上も解決できないのは不思議」

「そう言われてみれば、そうだよな。こんな事件、すぐに解決してもおかしくない。なるほど、英語を話す外国人のふりをした日本人か？」

と、ミサはトオルの説明にすっかり納得し、その推理に感心したが、マキは腕組みをしてトオルに念押しする。

「だけどき、聞き間違いとか思い込みとか、そういうこともあるよね」

「うん、そういうこともあると思う。だから、なんとなくそう聞こえたとか、そんな気がしたとかだと、ちょっとビミョウ」

ヒナは困ったような顔でトオルを見つめる。トオルはヒナに答えた。

「まあ、だから、池上さんは、兄ちゃんに事件のことをもう一度思い出してもらって、『アレルギー』というのは聞き違いじゃない。確かにそう言った。ということなら警察に連絡した方がいいと思う」

ヒナはトオルに、わかった、というようにうなずいてからマキとミサに目を向けた。

「あたし、兄ちゃんに、それ、もう一度確かめてみる」

マキも、そうね、とヒナにうなずいてから、トオルの肩をたたいた。

「さすが。キミの推理に納得がいく」

ミサが不思議そうな顔でトオルを見る。

『証言』とか、『捜査の範囲を狭める』とか『事情聴取』とか、キミは、いろんな専門用語使うけど、そういう言葉はどこでおぼえたの。マンガやビデオの刑事ものとか探偵もの？」

「うん。マンガも好きだしビデオも見る。小説も読むよ。探偵ものとか推理小説。ミステリーが好きなんだ」

「へえ…探偵もののマニアなんだ」

「うん。ミステリーオタクとか言われる」

翌日、一時間目の放課。池上ヒナはマキとミサと連れ立ってトオルの教室にやって来た。トオルは廊下に出てヒナの話を聞いた。

「犯人が言ったのは、アレルギーに間違いないだって。兄ちゃんは、『え、アレルギーの英語はアラジー？それは知らなかった。いや、そもそもアラジーなんて、そんな単語は知らなかった。だから、犯人たちがアラジーと言ったなら、何を言っているのか意味が分からなかったと思う。それに、自分は刃物を突きつけられて震えていたのに、クシャミしたあいつの言ったアレルギーという言葉が妙に気になって、（アレルギー？花粉症か？花粉症の時期なんか、とっくに終わったんじゃないのか？）なんて、そんな時に、そんなどうでもいいことがちらっと頭に浮かんだものだからおかしくって、それで、あいつがアレルギーと言ったことはハッキリ覚えているんだ』だって……」

ヒナの横に立つマキが、つけ加えた。  
「で、キミに言われたように、ヒナの兄ちゃんは警察に電話したんだって。だから、犯人はそのうち捕まるよ」

今日は七月十八日。明日は一学期の終業式で二十日から夏休みだ。下校後、トオルたちは水滝公園に集まった。公園は小学生であふれている。夏日の炎天下でも、子どもたちはひるまない。

トオルの仲間は最近、「ボール当て遊び」に夢中になっている。小学生の間で大人気のテレビ番組『戦闘中』をマネして、全員がバトルボールを二個ずつ持って戦う。二回当てられれば死亡で、どちらかのチームが全員死ぬまで戦う。

今日は、ミサとヒナと達也とトオルの四人のチームと、マキと健太と壮太と美加の四人のチームに分かれて戦う。コンビ二強盗のことをあれこれ相談するうち、お互い仲間意識が芽生えたようで、マキとミサにヒナの六年生の三人とトオルは公園でも一緒に遊ぶ。

達也と健太と壮太はトオルと同じクラスの五年生だ。走るのは健太がいつもトップだが、ボール投げの正確さは、やっぱり達也かな。美加は二年生だけど、なぜか兄の友達とすぐに仲良くなる。あいつは、けっこうすばしいから足手まといどころか戦力にもなる。

ボールを遠くから投げるのでは、なかなか当たらないので、相手に接近しなければならないが、それだけ当てられるリスクが高まる。その「かけひき」がおもしろいのだ。最近は、みんな、この「かけひき」が上手になって、なかなか勝負がつかない。

そんな『戦闘中』遊びをしたあと、公園の隣のコンビニに寄ってジュースやお菓子をかうこともある。コンビニのレジのうしろの棚には、『防犯ボール』と太い字で書かれた箱にバトルボールと同じサイズの真っ赤なボールが二個、客に見せつけるように置いてある。

防犯ボールとは、犯行現場で犯人や逃走車に投げつけることで逃走犯の追跡や逮捕の手がかりをつくる防犯グッズで、銀行やコンビニには、ふつうに置かれているのだそう。ボールが当たると外の殻が割れて中の特殊な塗料が付着する。水洗いすると汚れが落ちるように見えるけど、特殊なライトをあてると蛍光色に光るんだって。

トオルと達也と健太と壮太はレジのうしろの防犯ボールを見るたびに、「あの防犯ボールで『戦闘中』の真剣勝負をやりたいな」と、いつも言い合っていた。

そんなことを、きょうも考えながら、達也とトオルはレジのカウンターにジュースとお菓子を置いた。と、そのとき、うしろの方でキャットと女の人の悲鳴があがり、「あ、ひったくりだ。バッグをとった!」という店員の叫び声と同時に店の奥からサングラスとマスク姿の男が二人走り出て入口付近に立っていたマキを突き飛ばして店の外へとび出した。二人は止めてあった白いクルマのドアを開ける。それを見た達也とトオルは、店員の女の人の人に向かって叫んだ。

「うしろの防犯ボール、とって!」

ボールを一個ずつ受け取った達也とトオルは外へとび出した。ちょうど、二人の乗り込んだ白いクルマがタイヤをきしませながら駐車場から出ていくところだ。達也とトオルは無我夢中でうしろの窓ガラスめがけて、バトルボールを、じゃない、防犯ボールを投げつけた。達也の投げたボールがうしろの窓ガラスに命中して割れ、トオルの投げたボールもうしろのタイヤに当たって割れた。割れたボールから蛍光オレンジのペイントが飛び散って白いクルマに付着した。達也とトオルに続いて店からとび出してきたマキが叫んだ。

「あっ、当たった!」

店員から通報を受けた釜氷警察署は、パトカーを手配するとともに水滝町の交番にも連絡したよう。高下駄正巡査がバイクで駆けつけて来た。

「あ、なんだ。トオル君、キミか。防犯ボールを投げて、ひったくり犯のクルマに当たったというのは」

「いえ」

と、達也が高下駄巡査の前に一歩進み出た。

「僕です。僕の投げたバトルボールが、犯人の乗ったクルマのうしろの窓に命中したんです。こいつの投げたボールはハズレました」

「ん。キミは?」

「達也です。早川達也です」

トオルは達也の背中をつついた。

「おい、おれのもタイヤに当たっただろう」

やがて、出動した数台のパトカーは、防犯ボールのオレンジ塗料のついた白いクルマを発見した。パトカーはサイレンを派手に鳴らしながら追跡し、二人組の犯人を捕まえた。

事件は、すべて解決した。

逮捕された二人の万引き犯は警察のきびしい追及を受け、六月十七日のコンビニ強盗についても自供した。

夕飯後、水滝交番の高下駄巡査から電話があった。

「トオル君、またお手柄だね。今度の件も、もちろんだけど、六月十七日の駅の近くのコンビニ強盗事件、あれね。実は、われわれは、やはりアルバイト店員の証言にとらわれていてね、英語を話す外国人の線で捜査していたんだ。ところが、昨日、そのアルバイト店員からまた連絡があって、犯人は外国人じゃなくて外国人をよそおった日本人だと思うと訂正してきたんだ。そこで、前科のある日本人を調べたところ、それらしい二人が浮かんできた。そこへきて、マークしていたその二人が、今度のひったくり犯だったってわけ。それで、きびしく追及したところ、六月のコンビニ強盗についても、あっさり自白したんだよ」

「へえ…そんなに、うまいこと」

「で、あのアルバイト店員が言うには、犯人たちの英会話がフェイクだと見破ったのはトオル君、キミだということじゃないか。すごいね」

「いえ、たまたま、授業で習ったことがヒントになって」

「へえ…そうかね。ま、なんにしてもたいしたものだ。それで、郵便局の詐欺事件のこともあるし、キミに感謝状を授与すべきではないか、なんっていう話が署内で出てね」

「え？ 感謝状…」

「うん。で、署長からどうしたものかと相談を受けたんだけどね。二度も続けて事件を解決に導いた小学生なんてことが知れるとマスコミも騒ぐだろうなって。だけど、まだ小学五年のキミにとって、そういうことは、あまりいいことじゃないのではないかと、と珍しく署長と意見が一致したんだ。それで、ま、感謝状はやめておこうということになったんだよ」

「あ、はい……」

「それで、その代わりというのものなんだけど、署長がポケットマネーで、キミたちに、何かお礼をしたいと言ってるんだが……何がいいかな」

「え？ そんな。いいですよ」

「遠慮せんでもいい。どうせ、あの署長のことだ。そんなに出不さないよ」

「ええっ……困ったなあ」

「いいって。もらっとけ」

「うーん……そうですか。じゃあ……ええと……マックのハンバーガー」

「マックのハンバーガー？ いいのか、そんなもので？ もうちょっと、なにか…」  
「え？ あ、じゃあ…あのう…おまわりさん。あのとき、コンビニにいたのは防犯ボールを投げた達也と僕の二人だけじゃあなくて、ほかの友達と合わせると全部で八人なんですけど…八人分でもいいですか」  
「いいよ、いいよ。全然問題ない。そういうことなら、八人全員のお手柄だ」  
「よかった！ では、遠慮なく八人分。ハンバーガーの種類は、おまかせということでは」  
「にしたって、ハンバーガー八個か…シヨボいな。もうちょっと何か…」  
「じゃあ、飲み物とフライドポテトもつけてくれます？ はは」  
「お安い御用だ」

## 第二章 銀行強盗

疑わしきは罰せず

### 第二章 銀行強盗

疑わしきは罰せず

十月十日、木曜日。トオルが登校すると、教室の中は昨日の銀行強盗の話で盛りあがっていた。男子は教室のうしろ、女子は前のほうにかたまって口々にしゃべり騒いでいる。

「ニュースみた？ 海岸通りの銀行強盗」

「みた、みた。三人組で銃を持ってたんだよな」

「え？ 日本にもいるのか。銃を持った銀行強盗って…」

「銃でも、猟銃なら持てるんだって、届けりゃ」

「なんだ。猟銃か」

「ばか、おまえ。猟銃だって、最新式のライフル銃だぞ」

「最新式のライフル？ へえ…」

「怖えーな」

「強盗はクルマで逃げただけだ。ひとり転んでクルマに乗りそこなっただって」

「ダッセー」

チャイムが鳴って担任の雄太先生が来たので、みんな、あわてて席につき先生の顔を見つめた。でも、先生は事件のことには何も触れず『朝の連絡』を終えると、すぐに一時間目の授業を始めたので、みんながっかりした。

十月十一日、金曜日。きょうはゴミ出しの日だ。トオルはゴミ袋を片手に玄関を出た。家のゴミ出しはママから命じられたトオルの仕事だ。ゴミ置き場では、黄色いネットからはみ出した生ゴミの袋をカラスがつついてている。

いつものように「こらーっ」と怒鳴ると、カラスはトオルをチラッと見て、あーあ、しょうがねえな。せっかくエサにありつけたのに、みたいなふてぶてしい態度でゆっくり羽をひろげ、バサバサバサと音をたてて飛び去った。毎度のことだが、むかつくカラスだ。トオルはゴミ袋の山へ走り寄り、黄色のネットをめくって持ってきたゴミ袋を押しこむと、集団登校の集合場所へ急いだ。

「秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、からすの寝所へ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり…」

集団登校の先頭を歩く六年生の班長がニヤニヤしながらふり返るが、トオルは知らん顔して暗唱を続けた。きょうの国語で枕草子の暗唱テストがある。きのう不合格だったので、きょうは、なんとしてでも合格したい。

それにしても、昔のカラスは憎たらしくなかったのかな？ ……清少納言は夕暮れのカラスを見て「あはれなり」つまり「しみじみと心ひかれる」と感じたみたいだけど、その気持ちがさっぱりわからない。学校に着くと、下駄箱の前でマキとミサとヒナがトオルを待ちかまえていた。

「トオル。事件だよ。授業後に水滝公園へ集合。達也たちも一緒に。いい？」

「わかった」と、トオルはうなずいた。

下校後、水滝公園にマキ、ミサ、ヒナの六年生三人と健太、達也、壮太とトオルの五年生四人が集合し、もうひとり知らない女の子がいた。マキがトオルたちの知らない女の子を紹介する。

「この子、同じクラスの清原ナホ」

「よろしく」

と、軽く頭を下げてあいさつした清原ナホは、すぐに事件について話し始めた。

「あたしのイトコが警察に捕まったんだ。銀行強盗だと疑われているの」

「ええっ？」

あまりに衝撃的なことを、あまりにフツーに話すので、みんなびっくりした。清原ナホは気にせず続ける。

「二日前の銀行強盗のニュースは、みんな知ってるよね」

「海岸通りの銀行？」

「そう、それ」

「犯人は三人組で、たしか、まだ捕まってないよね」

「うん。まだ捕まってない。イトコは…あ、イトコって男だけど、銀行強盗の仲間だと疑われているんだ。二十一歳で今は無職。前の職場で、なんかトラブルを起こして仕事やめさせられたんだけど、そのあとも、知らない人とケンカしてケガさせ警察の世話になったこともある、とんでもないやつなの」

「ええっ？」

と、みんな、またも驚いて顔を見あわせた。清原ナホは、かまわず説明を続ける。

「とんでもないやつだけど、心はピュアで素直で気持のいいやつだから、あたしは嫌いじゃないの。た

だ、少しバカなだけ」

みんな、どう反応したらいいのかわからないので黙っていた。

「そのあとも就職がうまくいかなくて、つき合っていた恋人にも愛想つかされて見捨てられたの。そんな自分が嫌になっていたイトコは、水曜日の午後、つまり銀行強盗の起きた日ね。海岸通りの堤防をのり越えて、あの、なんていうんだっけ？ 妙な形のコンクリートのブロック」

「テトラポッド？」

「そう、それ。その上に腰かけて、海を眺めてぼんやりしてたんだって。で、そのとき、うしろでドサッと音がしたのでふり返ると、黒のバッグが落ちてている。中を見ると、おカネがいっぱい入っていたのでびっくりしたんだけど、すぐに警察に届けずにバッグを持ったまま街を歩いていたの。そのとき、警察の職務質問というのに引っかけかかって逮捕されたんだ。で、前科があるものだから、あの銀行強盗の仲間だと疑われて、今は拘留所というところに入れられているの」

「職務質問？」

と、みんなはミステリーオタクのトオルを見る。

「職務質問とは……ええと……たった今、犯罪をしたと疑われる人とか、あるいは、これから犯罪をしようとしている、そんなふうに見える人とかを警察が呼び止めて、いろいろ質問すること」

みんなに答えてから、トオルは清原ナホに質問した。

「で、そのおカネの入ったバッグが落ちて来たのは何時頃？ それと、銀行強盗のあった時間は？」

「あ、そうか。ええと」

清原ナホは、家から持ってきたスマホをとり出すと、銀行強盗のニュースを表示して確かめながら説明する。

「ええと、十月九日、水曜日の午後三時数分前、海岸通りの銀行に強盗。えー、窓口の営業が終了する直前に目出し帽で顔を隠した三人組が押し入った。一人は店員に向かって『両手をあげろ、なにもさわんな。おかしい動きをすると撃つぞ』と、猟銃を突きつけて脅し、もう一人は店内の客に向かって『何もするな。両手を頭につけて、カウンターの前の床に腰をおろせ。へたなマネをすると撃つ』と猟銃を振りあげて脅した。三人目の男は、店長に向かってバッグを三つ投げ『この中に金を入れろ』と叫んだ。店長は言われたままに奥の金庫から現金をとり出しバッグに入れて犯人に渡した。犯人三人は、それぞれバッグを一つずつ持って銀行をどび出すとクルマで逃走したが、一人は足がもつれたのか転倒したためクルマに乗りそこなった。だが、すぐに起き上がると走って逃げた。その男は猟銃を持っていない犯人だった」

「強盗が銀行を襲ったのが午後三時数分前だね。で、イトコがおカネの入ったバッグを拾った時間は？」

「三時半頃だと思う、だって」

「銀行強盗のあったのが三時半頃で、バッグを拾ったのが三時半頃。なるほど、時間は合うね。だけど、拾ったバッグの中のおカネが強盗にとられたおカネだってことは、どうしてわかったのかな？」

「あ、それ。バッグの中のおカネはバラの札だけでなく、銀行の名前に入った帯の札束もいくつかあったんだって」

「ああ、そうか。札束の帯ね」

「で、イトコの母親、つまり、あたしのママの姉ちゃんなんだけど、きのう、拘留所ってところへ行って

面会し話を聞いてきたの」

清原ナホはイトコが自分の母親に言ったこと、というのを思いだしながら話した。

あの日。海岸通りの堤防をのり越えてテトラポッドの上に腰をおろし、ぼんやり海を眺めていたら、うしろでドサツと音がしたので、ふり返るとバッグが落ちてたんだ。あたりには誰もいないので、おれは一瞬、空から降ってきたのかな？ って思ったんだよ。

だから、「このバッグは、どうしたんだ？」って、刑事さんが机をたたいて怒鳴ったとき、思わず「空から降ってきた」と答えちゃったんだ。そうしたら、刑事さん、「ふざけるな！」とキレて、そのあと、おれの言うことなんかぜんぜん信じてくれねえの。

おれは、別に、刑事さんをからかうつもりなんかなかったんだけどさ…あのときは、ほんとうに空から降ってきたのかと思って空を見あげたんだ。嘘じゃねえよ。だけど、考えてみりゃあ、刑事さんにあの答えはまずかったよな。空からおカネの入ったバッグが降ってくるわけねえからな。

実は、おれはあのあと、すぐに堤防の上へ登ってみたんだ。そしたら、ずっと向こうに、おれくらいの若いやつが自転車をもりこぎして走って行ったから、もしかしたら、あいつが放り投げたのかなと思って、刑事さんに、きつとあの自転車の男が銀行強盗だよ、って言ったんだ。

そしたら、刑事さんは「バカ、とった金を投げ捨てる強盗がどこにいる！」って、また机をたたいて怒鳴って相手にしてくれねえの。そして、「いいかげんなことを言うな。おまえだろ、おまえが強盗したんだろ。仲間はどこだ。素直に言え」って、もう、おれが強盗のひとりだと決めつけて、その自転車の男のことなんかまるつきり信じてくれねえの。

ま、おれは悪いこともするけど、銀行強盗なんて、やべえことはしねえよ。そんな度胸ねえって…え、自転車の特徴？ シルバーのありふれたやつだよ。えっ、なぜ、そのあとすぐ、バッグを警察に届けなかったのかって？ そこだよな。おれにも、そのときの自分の気持がよくわかんねえんだ。もしかしたら、あんな大金、今まで見たことねえから、ちよつとの間だけ持っていたかたかもしれない…と、まあ、イトコはこんなことを拘留所で母親に話したのだそうだ。

ミサがトオルの顔を見る。

「話のスジが通ってるじゃん。ナホのイトコは無実だよ。ねえ、トオル」

「ちよつと待って。三時半頃、ナホさんのイトコは海岸で銀行強盗がとったおカネの入ったバッグを拾った。それまでずっと、テトラポッドに腰かけて一人で海を眺めていた…そういうこと？」

トオルはナホの顔を見る。ナホがうなずく。

「うん。そうだよ」

「そういうことは、アリバイは無いってことになるなア」

「アリバイは無い、って？」

「うん。アリバイとは、犯罪が行われた時刻に犯罪の現場にいなかったっていう証明。つまり、犯罪が行われた時には犯罪の現場ではない別のところにいたという証明」

ミサが口をはさむ。

「あ、そうか。犯罪が行われた時、そこにいなかった。別のところにいた。それがわかれば犯人じゃあな  
いってことになるわけね」

「そう。それがアリバイってこと」

「だったら、いいじゃん。ナホのイトコは銀行強盗があったとき海岸にいたんだから。それがアリバイ  
ってことでしょ？」

トオルは「いや」と、ミサに向かって首を振ってから説明を続けた。

「それじゃダメなんだ。銀行強盗のあった時間、ナホさんのイトコは一人で海岸にいたってことだけど、  
それは本人が言ってるだけだよ。だれも証明してくれない。そういう場合はアリバイが無いってこと  
になっちゃうんだ」

ナホがトオルをにらむ。

「あたしのイトコが嘘ついてるってこと？」

「いや、そういうことじゃなくて、海岸にいたことが本当だとしても、本人が言ってるだけだとアリバ  
イがあるってことにしてくれないんだ」

「え？ そうなんだ……」

「ええと、アリバイが無いということになると、そのイトコが持っていたバッグは、イトコが銀行から  
とってきたものじゃなくて、誰かが投げ捨てたものだということを証明するしかないのかな。だけど、カ  
ネを奪った銀行強盗がそんなことするかなア？」

「だから、イトコの話は嘘なんじゃねえの」

と、達也が言い、ナホが言い返す。

「嘘じゃないと思う。あいつに銀行強盗やる度胸はない」

トオルは、「うーん」と、うなづいてからナホに確かめた。

「念のために聞くんだけど、ナホさんのイトコって、信用できるよね」

「うん、あいつは小さな嘘はつくけど大事なことで嘘はつかない。それに、面会の最後に、母親が、『私  
の眼をちゃんと見なさい。見て言いなさい。おまえは銀行強盗したの？』と、聞いたら、何の迷いもなく  
澄んだ眼で『やってない』と、すぐ答えたそう。それを聞いて母親は、ああ、この子は、やってないな  
と確信したんだって」

マキがナホを応援する。

「子どもが嘘ついてるか本当のことを言ってるか、そんなことはママならすぐわかるよ」

達也が反論する。

「それは小学生までだろ。うちのママは、兄たちも小学生まではみんな素直でかわいくて、何を考えて  
るかすぐわかったけど、中学生になってからは何を考えているのかサッパリわからないって、いつも嘆い  
てるよ」

ナホは黙ってうつむく。ミサが言い返す。

「達也のうちは特殊だろ。いくつになっても、子どもの心はママにはわかるものだって……これは世界  
共通、永遠の真理なの」

達也のうちは特殊だろと言われてカッとなったのか、達也はムキになった。

「永遠の真理？ ばか。そんなの聞いたことないよ」

「ばか、とは何よ。ばかとは…上級生に向かって」

ミサは顔色を変えて達也をにらんだ。だが、達也は引かない。

「ばかな話だから、ばか、と言ったんだ。上級生とかカンケイない」

「ちよっ、ちよっ」と

と、トオルはあわてて二人の間に入り、（なんとかしてよ）というようにマキの顔を見た。マキは一歩前に出て腕組みすると、達也の顔を正面から見すえた。

「達也。言いすぎだろ」

「だけど……」

と、達也は不満げにうつむいた。マキはナホに歩み寄って肩に手をやると、キリっとした顔つきで、ぐるりとみんなを見まわした。

「みんな、ナホの力になるうと、ここに集まったんじゃないか。みんなで力を合わせないでどうするの。ね、ミサ」

「うん。わかった」

と、ミサは小声でうなずく。ホッとしたトオルは、できるだけ明るく聞こえるように心がけてみんなに声をかけた。

「ええと、ナホさんのイトコの話を実事だとする。そこ信じる。それで、イトコを助けようとするなら、バッグを放り投げた自転車の男を見つけ出すしかない。みんな、いいかな？」

みんなは黙って顔を見あわせる。涙ぐんだナホを見たマキが声を張り上げる。

「みんなで探そう。その自転車の男」

健太が遠慮がちに言う。

「だけど、イトコの話が嘘なら、おれたちは、この世にいない人間を探すことになる」

「この世にいない人間を探す？」

と、また黙り込んだみんなを見て、ナホが必死の表情で訴える。

「みんな、お願い。自転車の男を探して、きっと、この世にいるはず」

みんながトオルの顔を見る。トオルは笑顔を作って明るく言った。

「よし、じゃあ、とりあえず現場検証だ」

「現場検証？」

「うん、そのバッグが空から降ってきたという海岸通りの堤防沿いに行って、なにか手がかりがないか、みんなを探すんだ。現場検証は早い方がいい。明日の土曜はどうだろ？ 明日も天気がよさそうだし」

マキが、みんなを見まわして叫ぶ。

「みんな、いい？ 明日、行ける？」

達也と健太が顔を見あわせる。

「明日はちよっ」と…」

「『ちよっ』なこっ？」

「予定が…」

マキは容赦しない。

「予定？ そんなの延期できるだろ」

壮太と健太が達也の顔をうかがう。達也はしぶしぶ答える。

「そりゃ、まあ…」

十月十二日、土曜日。午後一時、二年生の美加も加わって、小学校名のついたそろいの白ヘルをかぶった九名の捜査員は、隊長のマキを先頭に自転車に乗って海岸通りをめざした。

空は晴れて澄み渡り、上空まで見通しがいい。秋晴れの海岸通りの堤防沿いの道に人は見当たらない。全体を指揮する隊長のマキを除いて、捜査員は二人ずつに四班に分かれ手分けして調べ始めた。だが、すぐに、あちこちから疑問の声があがる。

「なんもないよ」

「こんなところに手がかりなんてあるのか？」

「ゴミしかないよ」

「ま、ゴミの中に手がかりがあるかも…だよな」

かがんで、なにかないかと探していた達也が体を起こすと前の方を見てつぶやいた。

「おっ、なんだ、あれは？ ……カラスが三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐ……」

達也はカラスの群がる場所に向かって歩き出した。

「おっ、おまえ、きのうの暗唱、合格したのか？」

と、健太があとを追う。

「あたりまえだ。二回も落ちるか」

拾った物を、みんなが持ち寄ると、マキがひとつひとつチェックする。

「空のペットボトルに鼻かんだティッシュ、丸めたチラシ、使い古しのマスクにサンドイッチの包み紙、空の菓子箱、新聞紙の破片…たばこの吸い殻…あーあ、汚ったねエ。まったく、ろくなものないな」

「こっちは、カラスが群がってたから、なにかなと思ったら、誰かがハンバーガー食べ残したみたいで…まったく、もったいないことしやがって。残すなら買うなって、マジで」

怒った達也が、カラスに食い散らされて、あとに残った破れた紙袋を投げ捨てようとする、トオルがあわててとめた。

「ちょっと待て、達也。その白い紙きれ…それ、レシートか？」

「ん、これ？ ああ、レシートだ」

「ちょっと見せてみる。レシートには日付と時刻が印刷してあるはず」

達也からレシートを受け取ると、トオルは声を出して読んだ。

「バーガーショップ『ダンケ』駅前店…十月九日、15:15…おっ、日付は銀行強盗の日だ。時刻は犯行の前夜…てことは、イトコがバッグを拾った時刻に近い……」

みんながトオルを取り巻く。

「うーん、もしかしたらもしかして…このレシートを捨てた人物が現金入りのあのバッグを放り投げた人物。つまり、自転車の男かもしれない…うん、その可能性は…ないことはない。まあ、そうでな

くても、なにかを目撃した可能性は大きい」

「マジか？」

「うん、ゼッターとは言えないけど、調べてみる価値はあると思う」

みんなの目が、トオルの持つレシートに集中する。マキが聞く。

「調べるって、どうやって？」

「防犯カメラだよ。このレシートを発行した店の、この時刻の防犯カメラの映像を見れば、このバーガーを買った人物が映ってるはず。そのときのレジの店員もその客をおぼえているかもしれない。で、その客がバッグを放り投げた人か、ま、そうでなくても、なにか目撃しなかったか、それを確かめるんだ」

「なるほど。さすが」

と、みんなが感心する。

「よっしゃ！」

と、トオルの説明に答えた達也は自転車に走り寄ってまたがると、アニメの主人公のようなポーズを決めて右の人差し指を駅の方角に向けた。

「みんな、行こう。ぜ！ バーガーショップ『ダンケ』駅前店へ」

トオルは手をあげて達也を止めた。

「ちょ、ちょっと待て、達也。早まるな。おれたち小学生が店に行っても相手にされないと思う。ここは、交番の高下駄さんに頼んだほうがいい」

「確かに」

と、みんながうなずく。

隊長のマキを先頭に、そろいの白ヘルメットは自転車で水滝町の交番へ急いだ。自転車をこぎながら、健太が隣の自転車の達也に声をかける。

「達也、お手柄だな。レシートを見つけたのは、おまえだ」

「いや、なんか、突然、『枕草子』の文句が頭に浮かんで。ははは、勉強しすぎかな。おれ」

「ばーか。ははは……いとをかし」

交番には高下駄巡査ともうひとりおまわりさんがいた。山内巡査長と名乗った。高下駄さんの上司のようだ。

「日付と時刻と担当の店員名がハッキリしています。だから…」

と、トオルが説明しても、高下駄巡査は乗り気でない。山内巡査長もまともに相手をしてくれない。高下駄巡査はトオルから受け取ったレシートをデスクの上に置くと顔をあげ、みんなを見回した。

「いや、銀行強盗の現場に落ちていたレシートならともかく、海岸通りの堤防沿いの道に落ちていたゴミの一部じゃなァ……犯行と関連があるというのは、キミたち、ちょっと無理があるんじゃないのか？ そのレシートだけで、店の防犯カメラの映像を見せてくれとは…」

マキがナホの背中に手をやり二人で前に進み出た。そして、デスクの椅子に座る高下駄巡査と山内巡査長に向かって頭を下げた。

「銀行強盗のカバンを拾ったこの子のイトコが強盗の仲間だと疑われて逮捕され、今も捕まったままな

んです」

高下駄巡査が二人を見る。

「ええと、キミは？」

「あたしは水島マキ。この子は清原ナホです。お願いします。バーガーショップ『ダンケ』の防犯カメラを調べてください。なにか手がかりが……」

「だから、そのレシートだけでは」

「無理ですか？」

「無理だね。悪いけど」

山内巡査長がびしゃりと言った。がっかりして交番を出たみんなは、とりあえず水滝公園にもどった。「どうする？」

みんなが、マキとトオルを見る。トオルは右のげんこつで左の手のひらをパンパンと二度たたいてから、みんなに訴えた。

「よし、『ダメもと』でバーガーショップ『ダンケ』駅前店へ行ってみよう。なにかわかるかもしれない」「『ダメもと』って？」

と、美加が聞く。

「ダメで、もともとして意味。ダメかもしれないけどやってみるってことだよ。初めからダメと決めつけなくて一応やってみれば、もしダメだったとしてもあきらめがつくだろう」

バーガーショップに着くと、九人は駐輪場をチェックした。

「ないな、シルバーの自転車」

「やっぱ、無理なんじゃない？」

「だよな。だって、あのレシート、誰が捨てたかわからないんだろ。手がかりが何もないと同じだよ」

「バッグを放り投げた自転車の男が、実際この世にいたとして、しかも、ここでバーガーを買ったことが事実だとしてもだよ。そいつが、きょう、また買いに来るか？」

「しかも、この時間にな」

あちこちからあがる不平不満の声を耳にしながら、トオルは、もう一度駐輪場に並ぶ自転車を眺めた。「ん？」

一台の赤色の自転車が気になった。秋の日に照らされ、ペンキ塗りたてみたいにテカテカと輝いている。(あれ？ タイヤにもペンキがたれている)。トオルは駐輪場の植え込みで小石を拾って自転車の近くと、赤のペンキをこすってみた。マキとミサが声をあげる。

「ちょっと、なにしてるの？ やばいでしょ？ そんなこと」

「ほら」

と、トオルは小石で赤ペンキをこすったあとを指さした。

「あっ、シルバー！」

と、そのとき、店の裏口のドアが開き、男がとび出してきた。

「おい。おれの自転車になんしてるんだ」

「あ、ちょ、ちょっとわけがあって」

「わけ？ なに言ってんだ。子どもだからといって許さんぞ」

「あのおう：あなたは二日前の水曜の午後、海岸通りの堤防の向こうにバッグを投げ込みませんでしたか？」

「えっ？」

男はみんなをぐるりと見まわすと、いきなり、トオルを突き飛ばしダッシュして逃げた。健太と達也と壮太が後を追う。立ち上がったトオルも追っかけた。男が交差点を右に曲がったのを見て、トオルは手前の道を右に曲がった。確か、男が走るあの先は行き止まりで、左には家があって道は右に曲がっている。マキとミサとヒナとナホと美加が、自転車でトオルのあとを追いかけてくる。

先回りしたトオルたちは自転車を並べて道路を封鎖した。

「来た」

と、トオルはマキとミサに声をかけた。自転車のバリケードを見て足を止めた男は、うしろをふり返った。うしろから、健太を先頭に達也と壮太がせまる。男は、トオルを見て叫んだ。

「おれは、なんにも知らない。関係ない」

トオルは、一歩前に出て言った。

「じゃあ、なんで逃げたんですか」

「びっくりしたからだ。おまえたちがいきなり…」

「あんたは銀行強盗の一味じゃないのか？」

「違う！」

「だけど、堤防の向こうに放り投げたあのバッグを持っていたんでしょ？」

「知らない。おれはなんにも放り投げてない」

「銀行強盗から現金の入ったバッグを受け取ったんじゃないんですか」

「おれは、なんにも受け取ってない。あいつが：勝手に自転車のカゴに突っ込んだんだ」

「なに、あいつが勝手に？ あいつ、って」

「知らない男だ」

「知らない男が、持っていたバッグを勝手に自転車のカゴに突っ込んだ…：そういうこと？ で、そのあと、その男は走って逃げた？」

「そうだ。走って逃げて、それからパトカーがサイレンを鳴らして次々にやって来た」

マキも一歩前に出た。

「あのね、その男はまだ捕まってないの。きっと、おカネを取り戻そうとあなたを探してるよ」「えっ？」

「その男に見つかると、あなた、危ないよ」

「危ない？」

「そう、命が危ない。おカネを取り戻せなくても、犯人たちは、顔を見られたあなたを始末しようとすると思う。急いで警察に届けないと殺されるよ。あの人たち、銃を持ってるから」

「銃？ なにを言ってるんだ…：お、おれは関係ないんだ！」

達也が一歩前に出て、右手の人差し指と親指で銃をつくと腕を伸ばして男に向けた。

「な、なんだ、おまえ。なんのマネだ」

「バーン」

と、声をあげた達也はニヤリと笑って男を脅した。

「おにいさん。あんた、マジやばいすよ。殺されるよ」

「そ、そんな」

それから、みんなで「自転車の男」を説得して交番へ連れて行った。男はバーガーショップ『ダンケ』のアルバイト店員だった。

交番に入ると、男はスチールの椅子に腰かけ、デスクをはさんで向いに腰掛ける山内巡査長と高下駄巡査に事情を説明し始めた。つきそった九人は少し離れて入口あたりに立ったまま、三人のやり取りを聞いていた。

あの日は、シフトの関係で仕事を三時に終え、店で買ったハンバーガーを食べながら自転車で家に向かったんです…え？ はい、バイトを終えて帰るとき、いつも店のハンバーガーを一個買って食べながら帰るんです。

で、途中、駅前大通りの交差点で信号待ちをしていたら、うしろから走ってきた男が、手に持っていたバッグを無言で私の自転車の買い物カゴに突っ込んで、赤信号を無視して道路を突き切り走って行っただんです。

そのあと、パトカーがサイレンを鳴らしながらやって来たので、私はこわくなって、一口かじっただけのハンバーグも買い物カゴに押し込むと家に向かって急いだんです。だけど、海岸通りの堤防沿いの道路まで来たとき、買い物カゴのバッグに気がついて、気味が悪いから中身も見ないで、そのまま走りながら堤防の向こうの海に放り投げたんです。

え？ バッグの中身ですか？ 見ていません。はい、そのレシートはそのときのものだと思います。いつも、紙袋とかゴミは捨てちゃまずいと考えて、丸めてとりあえず買い物カゴに入れるんです。だけど、あのときは、バッグを放り投げたあと、なんだか、とてもこわくなって買い物カゴの中の食べかけのハンバーガーも紙袋に入れて捨て、夢中で自転車をこいで家に帰ったんです。

ええ、自転車を赤ペンキで塗ったのは、もしかしたら、あの男が私の自転車のことを覚えているかもしれないと考えたからです。だから、わざと派手な赤色にして、こんな色じゃなかったなって、あの男がすぐわかるようにしたんです。え？ その男の顔ですか？ いえ、とっさのことでしたし、こわかったし、顔は見ませんでした。すみません。

男の説明が終わると、高下駄巡査は男の顔をまっすぐ見て言った。

「なるほど……ということは、あなたはバッグの中身が何かは知らなかった……そういうことですね……間違いないですか。あとで訂正すると、面倒なことになりますか」

「えっ、どういう意味ですか？ 私を疑うんですか」

「いえ、疑うわけではありません。ただ、そういうことも一応お知らせすることになっているので。ふむ、よろしい……」

高下駄巡査は横に座る山内巡査長を見た。巡査長は巡査にうなずくと、男の顔を見すえて冷たく言った。

「では、本署まで同行願います」

「本署までって？ ああ……私は……知ってることは、今、全部話しました。これ以上のことは何も知りません。だから、もう、帰ってもいいのでは？」

「いえ、あなたの話したことを疑うわけではありませんが、まず、あなたが海岸に放り投げたバッグが間違いなく銀行強盗で使われたバッグなのか確かめる必要があります。押収された現金入りのバッグは本署にあるので……」

「確かめるって、どうやって？」

「バッグにあなたの指紋がついていれば、あなたが海岸で放り投げたことの証明になります。もちろん、バッグの手提げの部分だけでなく、そのほかファスナーのつまみとか、そのあたりも調べます。もし、ファスナーのつまみや開き口のあたりに指紋がついていれば、中を開けた可能性があるということにもなります」

「え？」

「じゃあ、行きましょうか」

山内巡査長と高下駄巡査は立ち上がって男をうながした。だが、男はうつむいたまま動こうとしない。「どうしました？ さあ、行きますよ」

と高下駄巡査が、さらにうながすと男は顔をあげ苦しそうな表情で巡査と巡査長を見た。

「……す、すみません……実は……バッグの中から……少しですけど……札を抜き取りました。だけど、そのあと、とってもこわくなったから自転車にのったままバッグを堤防の向こうの海へ放り投げたんです」  
山内駄巡査長は椅子に座りなおし、机の上に両ひじをついて両手を組み合わせると、その上にアゴを乗せて男の顔をのぞき込んだ。

「ほう、なるほど……そういうことね。だから、子どもたちに追及されて逃げたり、自転車に赤のペンキを塗ったりしたんだ。じゃあ、買い物カゴにバッグを突っ込んだ男の顔は？ ……覚えてるのかな」

「はい。あいつはバッグをカゴに突っ込んだとき、私を……ぐっとにらんで脅すような顔をしたのでハッキリ覚えてます」

「うむ。では、写真を見れば、その男がわかるかな」

「たぶん、わかると思います」

巡査長と男のやり取りを見守っていた高下駄巡査は、顔をあげ入り口付近に立つマキヤトオルたちに視線を向けて片手をあげた。

「みんな、ご苦労さん。あとは、我々の仕事だから、君たちは帰りなさい」

一歩前に出た清原ナホが必死の表情で訴える。

「あの、あたしのイトコはどうなるんですか。バッグを拾った男ですけど。無罪ですよね？」

「ああ、そのあたりのことは、まだ何とも……いずれにせよ。あとで連絡するから」

事件は解決した。

釜氷警察署で写真を何枚か見せられた自転車の男は、「自転車の買い物カゴにバッグを突っ込んだのはこの男です」と証言した。

クルマに乗りそこなって走って逃げたその男は、バッグを持ったままだと逃げきれないと考え、信号待ちをしていた自転車の買い物カゴにバッグを突っ込んだのだ。その男の顔写真が公開されテレビで流されると通報が相次ぎ、二日後、その男は逮捕された。逮捕された男は仲間の二人についても自供した。そして、三日後には残り二人も逮捕された。

その翌日、高下駄巡査から電話があった。

「おかげで事件解決だよ。トオル君。ありがとう。それにしても、ダンケのアルバイト店員が投げ捨てたレシート。あんなもの、よく見つけたね」

「ああ、あれですか。あれは達也が見つけたんですけど、なんか…国語の授業でやった枕草子がヒントになったって自慢しました。ははは」

「枕草子？　へえ…凄いな。まあ、なんにしてもよかった」

「あのおう…バッグを拾った清原ナホさんのイトコは釈放ですか？」

「ああ、あの若者か…実は…刑事の中には、あの若者を疑う者もいてね。つまり、あの若者もバッグの中の札をいくらか抜き取ったんじゃないのか、とね」

「えっ、うそ？」

「いや、私は、彼は嘘をついてないと思うけど、まあ、本当のところはわからない。『ダンケ』のアルバイト店員だって、バッグから抜き取った札の数をきちんと言ってるかどうか」

「えっ、銀行は、とられたお金の金額がわかるんじゃないですか？」

「うん、全体の金額はほぼわかる。だけど、三つのバッグに、それぞれいくら入っていたかわからないんだ。クルマで逃走した二人の犯人は、逮捕したとき、すでに結構な額のお金を使っている。それを正確に申告しているのかどうかかわからない。二人のバッグにいくらずつあって、いくら使ったかはわからない。誰が、いくらとっていくら使ったかは、本人以外にはわからないんだよ」

「ふーん」

「ま、日本の法律では『疑わしきは罰せず』の原則だから、バッグを拾った若者についてはね、『これからは、不審なものを拾った場合はすぐに届けなさい。特に現金などは、すぐに届けないと疑われる』と厳重注意で釈放だよ」

「釈放。ああ、よかった…あのー…『疑わしきは罰せず』って、どういうことですか？」

「ただ疑わしいだけでは罰せられない。裁判で、きちんとした証拠に基づいて証明されて有罪とならないと処罰されない、ってことだよ。ああ、逮捕もそうだよ。いくら警察が怪しいと思って簡単には逮捕できない。裁判所が、きちんと判断して逮捕してもいいよという逮捕状を出してくれなきゃダメ。もちろん、目の前で犯罪を犯している現行犯は別だよ。現行犯については、逮捕状なしにその場で逮捕できるけどね」

「ふーん。じゃあ、『ダンケ』のアルバイト店員はどうなったんですか？」

「ああ、彼の場合は…取った金額にもよるが横領罪が成立するかな。まあ、やったことは書類に残るだろうが、起訴されて有罪ということはないだろうな」

「へえ…そうなんだ」

「なんだ。ばかに熱心にいろいろ聞くじゃないか」

「あ、いえ。でも、今回は、いろいろ勉強になりました」

「なに、勉強になった？ それはよかった。…ん？ ところで、キミは将来、なんになりたいのかな」

「まだ、なにも考えていませんが…」

「だったら、刑事がいいよ。キミなら、刑事コロンボとかコナンのような立派な刑事になれると思うよ」

「あー、コナンって、刑事じゃなくて探偵では」

「あ、そうか。そうだったな。はははは」

「……」

「ところで事件解決のお礼だが…どうだろ。前回と同じでいいかな」

「はい。ありがとうございます。それじゃあ、今回は九人分でお願いします」

「おっ、仲間がひとり増えたな。了解だ」

イトコが釈放されて喜んだナホは、お礼にとクッキーを焼いてみんなに配った。山内巡査長と高下駄さんにもお礼を言いたいということなので、クッキーを持ってみんなで交番に行った。以後、九人の小學生は山内巡査長と高下駄巡査の二人とすっかり仲良しになった。

## 第二章 冬 少年レイ

### グラウンドをさまよう魂

## 第三章 冬 少年レイ

### グラウンドをさまよう魂

十二月十日、火曜日。今日は長距離走大会の日だ。トオルも達也も健太も壮太も、みんなこの行事が大好きで、お互い真剣で勝負し負けて悔し涙を流すこともある。

授業前の『朝の会』で担任の雄太先生は、黒板に「小春日和」と漢字で大きく書いた。

「今日みたいに風も穏やかで気温もあがり、冬なのにまるで春を思わせるような天気を『こはるびより』という。きつと、今までの練習で見せたみんなの努力と熱意が天に通じたんだ。今日は長距離走にとつて絶好のコンディションだ。申し分ない。いいか、長距離走は自分との戦いだ。みんな自分の持てる力をフルに出し切ってがんばれ。先生も持てる力を出し切って全力でみんなを応援する。いいなっ！」

「はあーい」

雄太先生は学校行事が大好きで、行事となるといつもほかのどの先生より張り切る。それにしても、なにかいいことでもあったのか、今日はメチャメチャ気合が入っている。

長距離走は学年ごとにおこなわれる。一、二時間目の授業を終えたあと、五年生はグラウンドに出た。青空の広がる冬晴れで、風もなく日ざしは温かい。紅葉の目立つ五井の山が空との境界をくつきり見せて、歓声のあがる小学校のグラウンドをやさしく見守っている。

ちょうど、三年男子の先頭グループが外のコースを走り終え、校内にもどってきたところだ。グラウンドのトラックの白線に沿い、力を出しつくして走る生徒たちの外側には、親たちがバラバラにぐるりと囲んで立ち並び熱い声援を送っている。親だけではない。爺ちゃんや婆ちゃんもいるし、隣の幼稚園から先生に付きそわれてやって来た園児たちも、行儀よく列をつくって無邪気に応援している。

やがて、最後の走者が先生に伴走されて姿を見せ、大声援と大きな拍手に後押しされてゆっくりゴールを目ざす。グラウンドの北側に待機し声援を送っていた五年生の列からは、笑い声やおしゃべりの声が少しずつ消え緊張感がただよってきた。

ピリリリ、先生の笛の合図で三十二人の五年男子がスタートラインに立った。五年生のコースは約一・六キロになる。トオルは神経を耳に集中させた。校長先生が右腕を高くあげピストルをかまえる。

「よいい」、バーン！ いっせいにスタートした。まずはグラウンドのトラックを二周する。トオルは先頭グループの二位の位置をキープして二周し、正門から外に出た。門の外の道路には『交通安全』の腕章をつけた先生が二人立っていて「あまり広がるなァ」と声をかける。その隣で、交通整理で使う赤いライトのついた棒を持っているのは高下駄巡査だ。

「おっ。トオル君に達也君。よおし。がんばれよォー」

高下駄さんは、うれしそうな笑顔を見せて声をかけてくれた。校外のコースを走り終えると北門から入って校庭を横切り、再び正門から外へ出る。もう一度、校外のコースを走ってから達也とトオルは、ほぼ並んで北門からグラウンドに駆け込んだ。残りはトラック一周だ。トップの健太は二十メートル以上先を大きなストライドでとぼしている。あいつにはかなわない。うしろの集団はまだ校外だ。トオルと達也は二着を争って最後の力をふりしぼった。二人がほとんどかさなって最終コーナーをまわったとき、突然、ピカッ！ と、まわりが光って強い光りに打たれた。いや、強い光につつまれた。と、そのとき、達也とトオルを外側からいっきに抜いてゴールしたやつがいる。

(えっ、だれだ?)

輝く光が目くらんだ達也とトオルは、よろめいて、もつれるようにゴールした。係りの先生が着順を書いた紙きれを手渡ししてくれる。

「二人、同時? いや、達也が二番だ。トオルは三番。一步の差だ」

「えっ、僕たち三番と四番じゃないの?」

「達也が二番、トオルが三番だよ」

「僕たち、今、ひとり抜かれたけど」

「抜かれた? なに言ってるんだよ。さァ、どいた、どいた。次がくる。むこうに並んで座れ」  
達也がトオルのシャツを引っばった。

「おまえ、見たよな」

「うん、見た。メチャはやかかった。だれだろ?」

「あんなはやいやつ、いたか?」

「わからん。だけど、先生は見えてないって……どういふこと？」

達也がハッと立ちどまる。

「おい、いるぞ。あいつ」

「え？」

トオルは達也の見つめる先に顔を向けた。一着の健太の隣に膝をかかえて座る青白い顔の男の子が悲しそうな表情で前を見つめている。見たことない子だ。この学校の生徒じゃない。

その子の横に腰をおろしたトオルは勇気を出して話しかけてみた。

「ねえ、キミ。はいね」

ふり向いたその子の眼はガラス玉のように透きとおっている。トオルの体をスーと冷たいものが通りぬけた。健太が顔をあげた。

「ひとりごとか？ おまえ、なんで横をあけてるんだ。もっと、こっちへつめろよ」

健太は左腕をトオルの方にのぼした。のぼしたその腕が見知らぬ子の体をつき抜けた。

「わっ！」

トオルが小さく叫ぶと、その子は悲しそう表情でトオルを見つめ、それからスッと消えた。健太が不思議そうな顔でトオルを見る。

「どうしたんだ？ おまえ、ぶつぶつひとりごと言ったり悲鳴をあげたり」

「ひとりごと？ 健太、おまえ、今ここにいた子を見てないのか」

「ここにいた子？ なに言ってるんだよ。だいじょうぶか？ ……あ、おまえ、熱中症だな。水分とれ」

下校時に何人かの友だちに聞いてみたが、トオルと達也が見た見知らぬ子の姿はだれも見えてないという。そして、おまえたちは死にもぐるいで二位争いをしたから熱中症になったんだ。それで意識がもうろうとしてまぼろしでも見たんだろ、と笑った。

だれも信じてくれないので、達也とトオルは二人だけで宙尾公園の丘にのぼり、話し合うことにした。水滝公園はいつも人が多いが、こちらの公園は広くて人をあまり見かけない。丘の上に腰をおろすと、トオルはまず確かめるように達也に言った。

「見えたのは、おれたちだけだな。ほかの人には、あの子の姿が見えてない」

達也はうなずいて声をひそめた。

「それに、トオル。おまえも見えたよな。健太の腕があいつの体をつき抜けた」

「そのあと、あの子はスッと消えた」

「っことは……」

達也とトオルは顔を見合わせ、声をひそめてつぶやいた。

「幽霊……」

言ってみて、トオルは、ぞっと鳥肌立った。風が立ち、丘のクスノキの葉が、ざわわっと音を立てて揺れた。二人とも黙って風の音を聞いた。しばらくしてから、達也が口を開いた。

「だけど、なんで、おれたちには見えたんだろ？」

「だよな。なんでだろ？ ……うーん………おい、達也、おれたちがトラックの最終コーナーをまわっ

たとき、なんかピカッと稲妻みたいに光ったよな」

「うん。まわりが一瞬パッと白くなった」

「あの光に打たれたのは、もしかしたら、おれたち二人だけかもしれない」

「二人だけ？」

「つまり、あのとき、あの場所であの光に打たれたおれたちだけに、あの子の姿が見えたとか……」

「あ、そういうこと？」

「うん、そうじゃないかなア……きっとそうだ。それくらいしか思いつかない」

「そうかア……だけど……あいつ、なんで、おれたちを抜いてったんだろ？」

「うーん。あの子、ていいうかあの幽霊。とっても悲しそうな顔をしてたな。なにかきつと、わけがあるんだよ」

トオルは、あの見知らぬ子の悲しそうな青白い顔と光のない瞳を思い出した。達也が怯えたような顔でトオルを見る。

「だけど、おまえ、幽霊とかかわるとやばいぞ。あっちの世界へつれていかれるって、死んだ婆ちゃんが言った」

「達也。おまえ、怖いのか」

「えっ、おまえは？ おまえは怖くないのか」

「いや、おれも怖い」

沈黙がしばらく続いたあと、トオルが口を開いた。

「怖いことは怖いけど、なんだか、あの幽霊がかわいそうになってきた」

「かわいそう？ おまえ、なに言ってるんだ。幽霊だぞ」

「だけど、あの幽霊、なにか言いたそうな顔をしておれを見たんだ」

「マジか？」

「うーん、どうしよう？ ……このまま、ほったらかしにしておくのも、なんか気持ち悪いよな」

「まあな」

「とりあえず、調べてみるか」

「調べてるってなにを？」

「幽霊って、なんで出るのか。そのわけ」

「はあ？」

「幽霊も事件も同じだろ。動機の説明が事件解決への第一歩だ」

「動機の説明っていったって……」

「それから幽霊が出たときどうすればいいか……なにがよくて、なにがダメか。そんなようなことも」

達也とトオルは公園の丘をおり、市の図書館へ行った。そして、達也は『耳なし芳一』、トオルは『幽霊の正体』を借りた。

翌日の授業後、達也とトオルは宙尾公園の丘に腰をおろし読んだ本について話し合った。

「これ、怖い話だけと役に立つと思うな」

達也は『耳なし芳一』を手にして話し始めた。

「おまえ、源平合戦って知ってるよな」

「うん。『学習まんが 日本の歴史』で読んだ。武士の源氏と平氏の戦いだよな」

「そうそう、それそれ。八百年以上前のことだ。源氏と平氏はあっちこっちで戦い、最後は海の上で船に乗って戦ったんだ。場所は、ええと」

達也は本を開いて確かめる。

「『壇ノ浦』。今の山口県の下関。本州と九州を結ぶ吊り橋の『関門橋』や『関門海底トンネル』の入り口がある」

「へえ…トンネルだけじゃなくて、橋もあるのか」

「うん。橋もあるんだって。で、最後の戦いに負けた平氏の一族で生き残った人たちは、男も女もおとも子どもも、みんな船から海に飛び込んで死ぬんだ。自殺したんだ」

「えっ、子ども海に飛び込んで死んだのか？ ……かわいそうに」

「うん、ホントかわいそうだよ。だから、死んだ平氏の人たちや子どもを、なぐさめるために、その海岸の近くにお寺が建てられたんだ」

「ふーん」

「そのお寺の若いお坊さんが、名前は『芳一』っていうんだけど、琵琶という昔の楽器を弾きながら『源平合戦』のお話をするのが得意だったんだ……楽器の伴奏で物語を話すように歌う、ていうか歌うように話す。ま、今で言うラップみたいなものかな」

「ラップ？」

「うん。で、その死んだ平氏の幽霊が、夜中になると芳一をお寺からつれ出して、自分たちのお墓の前で源平合戦の物語を演奏させてたんだ。芳一は目が悪くて、まったく見えなかったから、相手が幽霊だということも、演奏する場所がお墓だということも知らない」

「幽霊につれ出されて、夜中にお墓の前で演奏……怖えーな」

「だろ。おおぜいの幽霊が、お墓の中からそと出てきて芳一の演奏を静かにきいてるんだ。で、最後の場面になって、平氏の人たちが次々に海に飛び込むところになると、それまでシーンとしていた幽霊たちのあいだからすすり泣きや、もだえ苦しむ声が聞こえてくる…」

「うわっ、怖えー」

「メチャメチャ怖えーって。で、それを知ったおしょうさんが『そんなことを続けていると、おまえはあの世へ連れていかれるぞ。幽霊が呼びに来てもついて行ってはいけない。話しかけられてもこたえてはいけない』って芳一に命じて、それから、魔よけのために、芳一の頭のとっぺんから足の裏まで体中にお経の文句を書いたんだ。……で、どうなったと思う？」

「どうなったと思うたって、おまえ……どうなったんだ？」

「ふふふ、ここからが、マジ怖えーぞ……ふふふ」

「ばか、じらすな」

「その晩、幽霊の一人が芳一を迎えに来たが、いくら呼んでも返事がない。部屋の中には、琵琶はあるけど芳一の姿が見えない。だけど、耳が二つ空中に浮かんでいる。芳一の耳だ。それを見た幽霊は迎えに

来た証拠にと、その二つの耳を引きちぎって、血だらけの耳を、ぼたぼた血をたらしながら持って帰ったんだ」

「ちょ、ちょっと待て。なんで、耳が二つ空中に浮かんでるんだ？」

「芳一は部屋の中で座ってたんだけど、幽霊には、お経が書かれた芳一の体は見えなかったんだ。けど、耳だけは見えた。実は、おしょうさん、芳一の体の中の耳にだけ、お経を書き忘れたんだ」

「はあ？ ……耳だけ忘れた？ ……あとは、全部書いたのか？」

「あとは全部書いた。だから、耳はとられたけど命は助かって、それから幽霊は出てこなくなったんだ」  
「……………」

「ははは、どうだ。この話、役に立つだろう」

「どこが？」

「幽霊に話しかけられてもこたえてはいけない。ついて行ってもいけない。それに、幽霊は、お経が苦手だから、おれたちも幽霊にとりつかれて危なくなったら、学校の隣のお寺のおしょうさんに頼んで、体全体にお経を書いてもらえばいい。耳も忘れずにな」

「体全体にお経？ それ、まずいだろう。そんなんで学校へ行ってみる。『達也。おまえ、ついにタトゥー入れたか？ 大したもんだ。このぼか者』って、雄太先生に怒られるぞ」

「だよな。やっぱ、体にお経はダメか。じゃあ、おまえの方は？ おまえが借りた本は、どんな話だ」

「うん、おれが借りた『幽霊の正体』だけど、この本によると、人間は心と体でできていて、心の働きをコントロールするのが『魂』とか『霊』と呼ばれるものなんだ」

「れい？」

「うん、幽霊の霊。で、人は生きているうちは『この世』に住んでいて、死ぬと、霊が体から離れて『あの世』へ行くんだけど、死んだのに、『この世』にまだ『うらみ』とか『後悔』とかがある人の霊や、『やり残したこと』があると思っっている人の霊は『あの世』に行きたくないものだから、幽霊になって『この世』をさまようんだ」

「あ、幽霊って、そういうこと？」

「うん、そうみたい。だから、死ぬとき、『うらみ』とか『後悔』とか『やり残したこと』とかがない人の霊は、幽霊にならないでスッと『あの世』へ行っちゃうんだって」

「なるほど。てことは…つまり、長距離走の最終コーナーでおれたちを抜いたあいつは、死んだとき、なんか、まだ『あの世』に行きたくなくて、それで、幽霊になって『この世』をさまよってる…ってこと？」

「おっ、さすが。おれもそう思う。で、大事なのは、ここ…幽霊になるのは、『この世』にまだ『うらみ』とか『後悔』とかがあったり、『やり残したこと』があると思ったりしている人の霊なわけだから、まわりの人が、その気持を理解してあげて、なぐさめてあげれば、『この世』でさまよのをやめて、『あの世』へ行く。そうなれば、その幽霊はもう出てこない」

「ふーん…ただど、どうやって、なぐさめるんだよ」

「だから、まだ恨みとか後悔とかがあって、この世をさまよっている霊に対しては、『だいじょうぶだよ。キミを苦しめたあいつはあのあと処罰されて、ひどい目にあったから、もう、うらむ必要なんてないよ』とか、『だいじょうぶだよ。あんなこと、たいしたことじゃないし、だれも気にしてないから、いつまで

も悩むことなんてないよ』とか、『キミがやり残したことは、あとの人がやるから心配しないでね』とか言ってあげる。それで、幽霊が納得すれば、なぐさめられる、ていうか気持が楽になるはず」

「ふーん。なるほどね」

幽霊についてあれこれ考え、久しぶりに頭を使った達也とトオルは、なんだか考える力を使い切ったような気がして、どっと疲れが出てきた。ふたりは立ちあがって大きく伸びをした。伸びをしたまま丘の下に広がる街並を見る。街の先には、冬の日を受けて三河湾の海面が白く光っている。しばらく海を眺めてから、達也が振り向いた。

「で、おまえ、どうするんだよ。あの幽霊」

「まず、なぜ幽霊になって『この世』をさまよっているか、そのわけを聞く」

「わけを聞くなって、おまえ……幽霊と話をするつもりか」

「うん……あの幽霊、ていうか……あの子の悲しそうな顔が気になって、おれは夜ふとんの中にはいても、あれこれ考えちゃってなかなか寝つけないんだ」

「なかなか寝つけない？ マジか……おれはいやだな。幽霊と話なんかすれば、あっちの世界に引きずり込まれる。怖えーよ」

「だけど、達也。おまえ、あの子がかわいそうだと思うのか？ わけを聞いて、あの子の気持を理解してあげ、なぐさめてあげて、あの子の気持が楽になれば、あの子は幽霊になって、この世でさまよるのをやめるよ。そして、静かな気持ちになって、あの世っていうか天国へ行くと思うな」

「そうかな？」

「そうだよ」

「だけど、あいつ、また出てくるか？ ……話するって、おまえ、どうやってあいつに会うんだよ？」

「それも考えてみたんだけど、おれたちがあの子に出会った場所、あそこで同じ時間に同じように走って見たらどうだろ？ そうすれば、また現れるかもしれない。あのときは、ひとがおおぜいたから、あの子、なにもしゃべらなかつたけど、おれたち二人だけなら」

「おれたち二人って……おれも走ること？」

「ああ、おまえも頼むよ。……でも、まあ、達也、おまえがいやならいいよ。おれひとりやるから」

「あ、いや……おれは走るのは別にいいんだけど……幽霊としゃべるのはいやだな」

「わかった。じゃあ、しゃべるのはおれがやるよ」

「だけど、おまえ、しゃべるだけだぞ。誘われてもついて行っちゃダメだぞ」

「ああ、だいじょうぶだ」

「ホントか？『ボクのうちへ来ない？ 新しいゲームがあるよ』とか誘われても、おれはついていけないからな。戻ってこれなくなる」

「ははは、『ボクの友だちの中にはかわいい女の子がいっぱいいるよ』って言われてもか」

「ばか」

達也は真剣な顔でトオルにつめ寄る。

「おれはマジに心配してるんだ。冗談言ってるんじゃないぞ」

「わかった、わかった。ついていかないから心配するな」

トオルは、あわてて両手を合わせた。そして、あさって十二日の土曜か次の日曜のうち、どちらか晴れの日の午前十時、小学校のグラウンドで走ることにした。もちろん、あの日と同じように体育の服装で。

十二日の土曜日になった。朝から青空が広がり、長距離走大会の日と同じような冬晴れだ。トオルは少し緊張して学校へ行った。達也は少し青い顔をして待っていた。

達也とトオルは長距離走大会のスタート地点に立つと、声を合わせ「よいい…バーン」と叫んでとび出した。トラックを二周してから校外に走り出る。達也がトオルを抜く、トオルが抜き返す。そうして校外のコースを二度走ると、北門から、ほぼ並んでグラウンドにもどった。達也もトオルも真剣だった。トオルが抜く、達也が抜き返す。二人は最後の力をふりしぼって、かきなるように最終コーナーをまわった。と、そのとき、ピカッ！ と強い光りがひらめいて、二人はその中につつまこまれた。

「来た！」

あの子が、二人を外側からいっきに抜いてゴールした。達也とトオルも続いてゴールする。ハーツ、ハーツと肩で息をしながら、トオルは話しかけた。

「はいね、キミは。キミが一着だ」

「でも、三人だけだから…練習だよ」

「え？ まあ、そうだけど…ところで、キミはどこから来たの…名前は？」

「ボクは…あの……うんと遠いところから来たんだよ。名前はレイ。小学五年生」

「レイ？ 五年生…五年なら僕たちと同じだね。だけど、なんでここへ来たの」

「ボクは走るのが好きだから、小学校で長距離走とかマラソン大会とかやっているのを見ると、たまらなくなつて、ついついとび入りしちゃうんだ。このあいだは、じゃましてゴメンね」

「あ、いや…だけど、あのときはびっくりしたな」

「ボクは…練習ではいつも一番だったから、校内マラソン大会をとっても楽しみにしていたんだ」

「じゃあ、校内マラソン大会でも一番だったんだね」

レイは下を向き右足のつま先で土をけると、顔をあげ悲しそうに空を見あげた。

「それが…ボクは…急に出られなくなったんだ…大会の朝、集団登校の列にトラックが……交通事故故にあつて…」

「えっ？ ……」

黙りこんだトオルと怯えた達也を見て、レイはトオルに笑いかけた。

「ねえ、キミの友だちはさっきから一言もしゃべらないね。ボクがきらいなのかな」

「あ、こいつ？ こいつ……ひどいカゼをひいてね。ノドをやられて声が出ないんだ」

達也は、あわてて苦しそうな顔を見ると右手でノドを押さえ「うーうー」と、うなつた。

「かわいそうに。ずいぶん苦しそうだね」

達也は調子にのって、ゴホゴホとセキをしながら両手で腹をおさえ「ああ、いつ、うー」と大げさになる。トオルは達也の足を踏んづけて（ばか、やりすぎ）と合図した。そのとき、突然、いい考えが頭に浮かんだ。トオルは勢いこんでレイに話した。

「実は…来週十九日の土曜か次の日曜のどちらかで、きょうみたいに天気の良い日に、ここで長距離走

大会の決勝があるんだけど、キミも出ないかな……決勝に勝ち残った選手は……ええと、僕たちもいれて……十人くらいだけど」

レイの顔がパッと輝いた。

「え？ ボクも出れるの？ ボクは予選に出てないよ。それに、ここの学校の生徒じゃない」

「キミに実力があるってわかったから予選には出てなくてもいいんだよ。ええと、なんと言ったかな……しょ、しょうたい、招待選手だよ。それに、出場する選手はこの学校の生徒だけじゃないんだ」

「そうなの？ でも……なァ……」

「だいじょうぶだよ。出てよ」

「うーん……でも、いいのかな……だれも文句言わない？」

「言わないよ、だれも。心配ないって」

レイは下を向き、また右足の先で土を蹴ると空を見上げた。それから、とっとうれしそうな表情でトオルの顔をまっすぐ見た。

「ホントにいいんだね」

「うん。問題ない。だいじょうぶ」

「わかった。じゃあ、ボクも、大会に出場させてもらおう」

「よかった。キミみたいに実力のある人が出ると大会は盛りあがるよ」

「ありがとう。あのね、今度の土曜は快晴だよ。ボクにはわかるんだ」

「へえ……土曜日の天気がわかるんだ。よし、じゃあ、土曜の朝十時、ここへ集合だよ」

レイは手を振ってグラウンドを去った。

レイが姿を消すと、達也が怒ったような目つきでトオルを見る。

「おまえ、『長距離走大会の決勝』ってなんだ？ おれは聞いてねえぞ」

「ああ、ごめん、ごめん。きのう、寝ながら考えてたんだ。どうすればあの子をなぐさめられるかって。でも、よくわからなくて寝ちゃったんだけど……今、あの子、楽しみにしてた校内マラソン大会に出られなかったって……その朝、交通事故にあったからって悲しそうに話しただろ。あのとき、おれはレイがこの世で『やり残したこと』って、それだなんて思ったんだ。だったら、長距離走大会決勝を聞いてレイを参加させてやればレイの気持ちも楽になるかもしれないって考えついたんだ」

「あ、そういうことか……だけど、おまえ、選手が十人くらいってだれのことだ？」

「あれは、ま、テキストに言ったんだけど、まず、おれたち二人に健太と壮太で四人。あと六人くらいなるとかなるだろ」

「なにかなるか？ マキやミサはダメだろ」

「女子はダメだな。長距離走は、どこの学校でも男女別々にやるだろ」

「だよな。マキにミサにヒナにナホ、それに美加を加えれば、とりあえず九人はそろうけどなあ」

「まあ、おれとおまえ二人して、走るのが好きなのやつに声をかけて集めよう。この学校だけじゃなくて、幼稚園時代の友だちにも。おまえ、そういうの得意だから頼りになるよ」

「ばか、おだてるな。だけど、幽霊といっしょに走るんだぞ。いやがるだろ、みんな」

「だから、怖がるやつにはないしよ、わかってくれそうなのやつには説明してもいい。なあ、達也。おれ

「たちは、あのかわいいそうな幽霊の『やり残したこと』をやりとげさせて、心残りなく天国へ行けるように、ちょっと手助けするんだよ」

「ふん、ひと助けてわけか？ いや、ひとじゃねえ。幽霊だ。……だけどなァ……」

達也は腕組みしてうつむき「うーん」と、うなってから顔をあげた。

「やっぱ、やめようぜ、トオル。やべえよ。これ以上幽霊とかかわると、おれたちあっちの世界に連れていかれるぞ」

「またそれか。だいじょうぶだ。達也。おれたちは、こっちの世界でさまよう幽霊をあっちの世界へ送ってやるだけだ。長距離走が終わったら、レイとはお別れだ」

「そんな、うまいこといくかァ？」

「いくって」

「うーん…おまえ、どうしてもやるつもりか」

「ああ、やる」

「そうか…じゃあ、トオル。悪いけど、おまえひとりでやってくれるか？ おれはやっぱ、やめとく」

「えっ、やめ？ ちょ、ちょっと待てよ…：なあ、達也。あの子は楽しみにしていたマラソン大会のその日の朝に死んじゃったんだぞ。だから、おれが『長距離走大会決勝』って言ったら、あの子、メチャメチャうれしそうな顔をしたじゃないか。な、達也。あの子の力になってやろうって、かわいいそうじゃないか」

達也は無言でうつむく。トオルは達也の顔をのぞきこんで手を合わせた。

「ねえ、達ちゃんお願い。頼むよ、協力してくれ。たのむッ」

手を合わせてトオルは頭を下げた。二人は互いに無言のまま動かない。しばらくして、達也がしぶしぶ顔をあげた。

「わかった、わかった。わかったよ、トオル。協力するよ。ばか、おまえ、手なんか合わせて拝むな。おれはホトケさんじゃねえぞ」

「ははは」

「それに、『ねえ、達ちゃん』とか気持わりい声出すな」

「ありがと達ちゃん。やっぱ、おまえっていいやつだな」

達也は「ふん」と顔をそむけて、グラウンドの北に眼を向けた。体育館の前にイチョウの木が一本まっすぐ伸びている。その手前が長距離走のスタート地点だ。

「だけど、トオル…『長距離走大会決勝』ということになると、スタートにはピストルの合図があるな。自分たちで『よいい、バーン』と叫ぶんじゃウソくせー」

「確かに。自分たちで『バーン』は、ないな…：うーん…：ピストルと火薬か…：」

「だれか持つてるかな」

「いや、あんなもの…だれも持ってないだろ。うーん…：ピストルと火薬は…：やっぱ、学校の借りるしかないか」

「借りる？ 貸してくれるかな」

「だから、こっそり借りる」

「ええっ、それって泥棒と同じだろ。おまえ、悪いことすると、死んでから地獄だぞ」

「心配するな、達也。おれたちは幽霊が天国へ行くのを手助けするんだ。地獄なんか落ちるはずがない」

「……おまえって、けっこう、わるがしこいな。じゃあ、ピストルを撃つ先生はどうする」

「ピストルを撃つ先生か？ ……うーん、どうしよう」

「雄太先生に頼むか」

「雄太先生？ それはダメだろ。雄太先生が幽霊の話なんか信じるはずがない。それに、『おまえたち、勝手に学校で長距離走大会決勝なんて絶対許さん』って言われたら、すべてパーだぞ」

「それもそうだな」

「なあ、達也。おまえの一番上の兄ちゃんはどうだろ？ 先生役をやってくれないかな」

「達也は五人きょうだいの末っ子で一番上の兄ちゃんは大学生だ。」

「兄ちゃんの勝也？ むりだよ。『寝ぼけたこと言ってるじゃねえよ』って、ばかにされる」

「だから、幽霊のことはないしょだよ。ただ、友だちと長距離走をすることになったから、ちょっと手伝ってくれない？ 先生役で『よいドン』のピストルを撃つと助かるんだけど、とかなんとかうまいこと言って頼めないかな」

「むりむり。そんなことで、あの勝兄ちゃんがオッケーするとはとても思えん」

「だよな。おれもそう思う…うーん…なにか、おまえの兄ちゃんが食いつきそうなことってないかな」

「兄ちゃんが食いつきそうなこと？」

「うん…：なあ、おまえの兄ちゃん、健太の姉ちゃんと友だちになりたいとか言ってたか？」

「ああ、言ってた」

「言ってたよな。だったら、健太の姉ちゃんとデートできるように、おれたちで頼んでみるから…ってのはどうだ？ …：それなら食いつくじゃないか？」

「うん、それならきつと食いつく。だけど…：あの姉ちゃん。あれで、けっこう理想が高いって健太が言ってたぞ。だから、なかなかカレシができないんだって」

「カレシができない？ てことは、カレシがない。だったら、ちょうどいいじゃね」

「ちょうどいいって言ったって、おまえ、そんな…都合よくいくか？」

「健太から姉ちゃんに頼んでもらうんだよ。一度だけでいいからデートしてやってちょうだいって。な、そのあとは、どうなっても、おれたちには関係ない」

「おまえ、やっぱりわるがしこいな」

「賞状はおれが用意する」

「え？ 賞状もいるのか」

「いるだろ。ちゃんとした大会の決勝だぞ」

「ちゃんとした大会の決勝？」

「そうだよ。なあ、達也。おれたちはいいかげんな長距離走をテキトーにやって、嘘ついてレイをなぐさめるんじゃないぞ。ちゃんとした『長距離走大会決勝』をやって、みんなでレイと真剣勝負するんだ」

「みんなでレイと真剣勝負する？ …：あ、そうか。そういうことか…よし、わかった」

「達也は「じゃあな」と手をあげて帰りがけたが、立ち止まって振り返った。」

「なあ、トオル。マキやミサはどうする。このこと話すか？」

「うーん、どうしよう……選手以外には、あんまり知られない方がいいと思うけど……マキやミサたちには知らせておいた方がいいかな」

「その方がいいんじゃない？ それに、話をすれば、なんか手伝ってくれるだろう」

「それもそうだな。じゃあ、月曜の授業後、ここで話すか」

達也と別れて家に帰ったトオルは机の引き出しの貯金から千円札をとり出すと、自転車に乗って文具コーナーのある大型書店へ行った。賞状は三枚あればよかったのにバラでは売ってなかった。「十枚 五百五十円」の出費はちょっと痛かったけれどしかたがなかった。

部屋に戻り賞状をとり出し、トオルは鉛筆で下書きを始めた。最初の一枚に「長距離走大会決勝」と書く。続いて、その下に「一位 健太」と書こうとしたが、(待てよ、一位はレイかな)と迷った。(うーん)と、しばらく考えてから名前を書くのは、やめにした。健太が勝つかレイが勝つかわからない……いや、ふふふ……もしかしたら、自分が一位になるかもしれない。ははは……ま、その可能性は低いけれどゼロではないだろう。だから、三枚の賞状それぞれに「長距離走大会決勝」と書き、その下に「一位」、「二位」、「三位」とだけ書いた。

それから、(ちよつと待てよ)と、また考えた。考えてみたら、レイのことは先生役の達也の兄ちゃんには知らせないことになっている。(うーん、どうする?)と、しばらく考えてから、トオルはもう一枚賞状をとり出すと「長距離走大会決勝 優勝」と書いた。

あれこれ想像しながら鉛筆で下書きしたり筆ペンで清書したりしていたら、気持ちがどんどん高まってきた。土曜日のお大会がとっても楽しみになってきた。

ママのコンパクトカメラも借りた。大会が終わったら記念写真くらいとるだろう。問題は、ピストルと火薬だ。職員室かグラウンドの体育倉庫にあると思うけど、雄太先生にそれとなく聞けばわかるだろう。こっそり借りる役は達也に頼もう。あいつなら、うまいことやりそうな気がする。みんなでイタズラして、みな捕まっても、なぜか達也だけはいつも逃げきる。それに口がかたい。たとえ捕まっても友だちの名前は出さないだろう。

十四日、月曜の授業後。宙尾公園の丘にマキ、ミサ、ヒナ、ナホの六年生四人と健太、達也、壮太とトオルの五年生四人が集まった。

達也とトオルの話を聞いた六人は、みんな気味悪がって顔を見合わせた。風が立ちクスノキがざわつく。しばらくして、ミサがわざとらしく声をあげて笑った。

「そんなばかな話にだまされないよ、達也。今どき幽霊なんて信じる人間がいると思う？ トオルとふたりで、あたしたちをからかっているんだろ」  
達也が声を荒げる。

「嘘じゃねえって……ホントに見たんだ。トオルはその幽霊と話をして、長距離走大会の決勝大会なんつてこと、ひとりで決めて幽霊を誘ったんだ。土曜日、あの幽霊、学校に来るよ」  
みんながトオルの顔を見る。

「うん。来ると思う」

トオルの答えにヒナとナホが顔をこわばらせる。マキが口を開いた。

「まあ、達也ひとりなら、夢でも見たんだろと言いたいけど、トオルも見たということだからなァ…」

「健太や壮太はどうだ？ 信じるよな」

達也に言われて、健太は半信半疑の表情でこたえる。

「まあ、信じろと言うなら信じてもいいけど……」

「おれが嘘ついてるっていうのか」

「い、いや。そういうわけじゃないけど……」

「うーん」

と、うなりながらヒナが言う。

「幽霊が見えるのはトオルと達也だけというのがね」

トオルはヒナにうなづく。

「そうだよ。嘘だと思われても、しかたがない。だけど、本当だよ。光に打たれた達也と僕には見えたし話もできたんだ」

それでも納得がいかないようで、みんな黙りこむ。トオルは続けた。

「かわいそうにあの子。楽しみにしてたマラソン大会に出られないまま死んじゃったから、悲しくて、くやしくて、その気持ちが強すぎて、だから死んでも天国へ行けずに幽霊になってこの世をさまよってるんだよ」

「……」

しばらく沈黙が続いたあと、マキが声をあげた。

「ま、トオルがそうまで言うなら、その話、信じるけど……でも、男子だけで走るんだろ。あたしたち女子が行っていいの？」

「うん。マキたち女子は、まず選手の受付をして、そのあとスタート地点に移動させて並ばせる。それから、ゴールした選手に着順を書いた紙を渡し、表彰式では校長先生の補助をする。そのあと写真を撮る。要するに、実際の長距離走で先生たちがやってた仕事。あれを全部やってもらいたいんだけど、いかな？」

「ああ、そういうこと？ いいよ、できるよ。問題ない。ねえ、みんな」

ミサとヒナ、ナホがうなづく。マキはトオルの顔を見てオッケーとうなずいた。

「だけど、受付するなら、選手名簿があるな。トオル」

「選手名簿？ あ、そうか。明日渡すよ。だけど、この話は、他の誰にも話さないでよ。話が広まって先生に知られるとやばい。先生が知ったら決勝大会なんて禁止されると思う」

「うん。わかった」

半信半疑のまま、みんな帰ったが、達也とトオルは健太を引きとめた。二人の頼みを聞いて、健太は困ったような顔をした。

「まあ、いちおう頼んでみるけど、姉ちゃん、なんて言うかわからんよ」

達也が声を強めて迫る。

「だから、おまえに頼んでるんじゃないか。うまいこと言って説得してくれ、頼むよ。おまえの姉ちゃん

が、いいよって言えば、うちの兄ちゃんなんかイチコロだ」

「わかった。やってみるよ」

レイが予言したとおり、十二月十九日の土曜日は朝から青空が広がった。雲ひとつない。さわやかな空気につつまれて、トオルの頭の中は澄み渡った青空のようにすっきりしている。今なら、どんなにむずかしい算数の問題でもスラスラ解けそうな気がする。

マキとミサ、ヒナ、ナホ、それに美加の女子五人は体育の授業のときのジャージを着て、

「受付」と書いた紙を貼った机のうしろにひかえている。それぞれの左腕には『進行係』と書かれた腕章まで巻かれてあり、みんなやる気満々だ。やがて、次々に集まって来る選手を名簿でチェックし朝礼台の前に誘導して並ばせていく。

朝十時、小学校のグラウンドの朝礼台の前に十人の選手が五人ずつ二列縦隊で並んだ。トオルと達也に、ふたりが必死になって集めた六人と、健太に壮太だ。そして、もうひとり、招待選手のレイがいる。レイは緊張しているのだろう、この前よりもっと青白い顔で、みんなから少し離れて立っている。でも、レイの姿は自分と達也にしか見えないはずだとトオルは思った。トオルと達也はそれぞれ選手の列の先頭に立ち、受付の女子は選手たちの横に四人一列で並んだ。

達也の兄ちゃんがやって来た。きょうの午後、デートの約束を取りつけているそうで、とっても機嫌がいい。紺のジャージの上着の中に白のワイシャツを着て、赤と白のシマもよりのネクタイまでしている。さらに、白の野球帽をかぶり、首から笛もぶら下げている。ちょっとずれていると思うけど、本人は小学校の先生になりきっているようだ。きつと、昔の小学校の先生って、冬の長距離走大会のときはみなあんな格好をしていたんだろう。兄ちゃんは、右手を軽くあげて達也とトオルに合図をすると、そのままふたりの前を通り過ぎ、あたりまえのように朝礼台にあがった。そして、首にぶら下げた笛を手にとる。ピリリリリ、澄みきった青空に笛の音が渡る。

「あー、みんなそろっているかな。では、ハイ、おはようございます。えー、今日は、よく晴れて風もなく、長距離走大会決勝にとって絶好のコンディションです。うー、選手の皆さんは、あー、日ごろの練習の成果を存分に発揮して、えー、スポーツマンシップにのっとり、うー、正々堂々と戦ってください。あーいさつは以上です。それでは、全員スタートラインに移動しなさい」

トオルは驚いて、横に立つ達也の体をつついた。

「あいさつ、頼んだのか？」

「いや、頼んでない。びっくりした」

やっぱり、達也の兄ちゃんは達也と同じでノリのいい性格なんだ。

走るコースは校内長距離走大会と同じだ。まずはグラウンドのトラックを二周する。そして、正門から外のコースへ出て、北門から学校に戻り、また外へ出る。次に北門からグラウンドに入るとトラックを一周してゴール。

マキとミサが選手を誘導しスタートラインに並ばせる。達也とトオルは真ん中あたりに位置をとった。レイは、アウトで構えている。

ピリリリリ、笛を吹き、達也の兄ちゃんが声を張り上げる。

「選手は位置について！」

兄ちゃんは右手を高くあげピストルをかまえる。

「よいい」……バン、バン

「フライング：やり直し」

二連発の号砲に、選手はみな驚いて顔を見合わせた。

「うそ？」

「マジか？」

そして、不満の声があがる。

「わざとだろ。ただ単に、もう一回ピストルが撃ちたいだけじゃねえの？」

「『よいい』からピストル撃つまで間があきすぎ」

そんな声にひるむことなく、達也の兄ちゃんは首にぶら下げた笛をもう一度吹く。ピリリリリ

「選手はだまって位置につきなさい」

それから、ゆっくり右手をあげピストルをかまえる。

「よいい、バーン

今度は、きれいにスタートが切れた。健太が先頭に飛び出す。トオルはピッタリあとについた。きょうは体が軽い。上体をまっすぐ保ち、つま先で地面をける。トオルは軽快にとぼした。達也も壮太もみんな調子がいいみたいだ。うしろにびったりついている。レイはそのうしろだ。トラックの二周目に入る。前を走る健太のフォームは完璧だ。体の軸がぶれない。大きく腕をふり、足を高くあげて地面をつま先でける。そのストライドが大きい。いつもなら、このあたりで十メートルは差をつけられる。ところが、きょうはどういうわけか、トオルは健太の背中にピタッとくっついていて突き放される気がしない。達也も壮太もレイも続く。そのまま五人はトラックをもう一周し外に出た。

校外に出ても五人のスピードは落ちない。ひとかたまりになって校外のコースを二度走ると、健太を先頭に五人は、ほぼ同時に北門からグラウンドに駆け込んだ。その瞬間、レイが健太を抜いて先頭に立ち、四人を一気に引き離れた。はい、しかも走るフォームが美しい………どんどん加速したレイは、そのままトラックを一周しゴールする。少し遅れて健太が続き、トオルと達也が続く。達也がトオルを抜く。トオルは最後の力を出し切って「ヤァー」と叫んでゴールした。

「一着！」…「二着・三着！」と叫んで、達也の兄ちゃんが健太と達也とトオルの背中を順にたたたく。マキとミサとヒナが着順の紙を選手に手渡す。

達也の兄ちゃんはデートの時間が近づくにつれ、ますます機嫌がよくなった。

「さあ、三位まで表彰するぞ。はい三人。並んで、並んで、おら、こっち、こっち」

レイと健太と達也とトオルの四人は、達也の兄ちゃんの前に並び、マキとミサが賞状を持って兄ちゃんの横にひかえて待った。

「一位、健太君！」

と、声を張りあげた達也の兄ちゃんは、「エヘン」と、ひとつ咳払いをしてから、かっこうつけて賞状を読みあげ「はい、おめでとう」と手渡す。みんなが歓声をあげ拍手する。健太はふり返ると賞状を高く掲げてVサインをする。「つぎ、二位、達也！」と、兄ちゃんが叫んで、横にひかえるマキに手を出す。

ミサから二位の賞状を受け取ったマキが兄ちゃんに渡す。

そのあいだに、トオルは美加に預けておいたもう一枚の賞状を手にとって「優勝、レイ君！」と心の中で叫んだ。「ハイ」とレイがこたえる。パッと白い光があがって、レイとトオルの二人をつつむ。自分たちの姿は、みんなには見えてないようだ。トオルは感じた。だれもこちらを見ない。トオルが賞状を読みあげて渡すとレイはにっこり笑った。でも、さびしそうな笑顔で眼には涙がにじんでいた。

「三位！」という声に、トオルはあわてて光の中から外へ出た。達也の兄ちゃんはトオルに賞状を渡すと、健太と達也を手招きする。

「さあー、記念写真、記念写真。おらおら、三人とも並べ。急げって、おれは忙しいんだ」

トオルも手招きしてレイをよび寄せ隣に立たせた。

ハイテンションの達也の兄ちゃんは、トオルがママに借りたカメラを持つマキに「あ、キミ。そうだ、キミだ。カメラを。いや、いい、いい。私が撮るから」と言ってカメラをとりあげ、かまえると、大きな声で聞いた。

「一の次は、なあーに？」

「は？」

「二だろ、おら」

「にー！」

カシヤ！

「これでいいか？ 三人とも笑顔でバッチリだ」

達也の兄ちゃんに示されたカメラの液晶ディスプレイを見ると、レイがトオルの横で賞状をかざし、うれしそうに笑っている。

表彰と記念撮影を終えた達也の兄ちゃんは、達也とトオルに「じゃあな」と言うとき急ぎ足で帰っていった。マキたち女子も受付の机を片付けると、トオルと達也に「じゃあ、私たちは帰るからね。おつかれ」と言って引きあげた。

幼稚園が同じだった五年生はみな残り、いろいろな話で盛りあがった。

「おまえ、幼稚園の頃とくらべてはやくなったな」

「おまえの方こそ」

「こんど、みんなでキャンプへ行くかア。バーベキューやろうぜ」

「いいなア、やろ、やろ」

「おまえ、今、ハマってるゲーム、なんだ？」

「担任の先生って、どんな人？」

「クラスの子は…どう？ おまえ、カノジョいるのか？」

「いるわけねえだろ」

「こいつ、いるぞ」

「うそ？」

久しぶりに出会った十人は、わいわいがやがや、あーだ、こーだと楽しそうにしゃべくりまくった。

トオルはふと気になってレイの姿を探した。レイは、少し離れたところから、さびしそうな表情でみんなを眺めている。トオルはどうしていいのかわからなくなって、とても悲しくなった。でも、ここはがんばらなくてはと考え、笑顔でレイに近づいた。

「レイ、はやかったね。グラウンドにもどってからのラストスパートがすごかった。二位の健太をトラック半周以上は引き離れたよね。優勝おめでとう、レイ」

「ありがとう」

レイは、さびしそうにほほ笑んだ。

みんなが帰ったあとも、達也とトオルはグラウンドに残った。グラウンドには、レイと達也とトオルの三人のほかだれもいない。いよいよお別れだ。レイは、達也とトオルの顔を交互に見つめると言った。「ふたりとも、ありがとう。みんなと走れて、うれしかったよ。とっても……」

達也とトオルは「うん」と、うなづく。「じゃあ」と、レイが言う。レイの気持がジーンと伝わってきて、達也もトオルも返事ができない。「じゃあ」と、もう一度レイが言う。達也とトオルは黙ってうなずいた。

レイの眼に涙がにじむ。グラウンドがパツと輝き風が起る。校庭のクスノキが、ざわわっ、と音を立てて葉を揺らし、イチョウが黄色い葉を散らす。

レイの眼からあふれた涙が白い頬を伝わる。レイは静かに泣いている。達也とトオルも泣いた。「ありがとう」と、かすかに、つぶやいたレイの白い顔が、どんどん薄くなる。風はやみ、すべての音が消えた。グラウンドをおおう白い光の中に溶け入るようにレイの姿が静かに消えていく。達也が声をあげて泣く。トオルも大声で泣いた。達也とトオルは、そのままずっと、その場にたたずんでいた。

家に帰って、カメラの液晶ディスプレイを見ると、トオルの横で賞状をかざし、ほほ笑んでいたレイの姿が消えていた。トオルは思った。レイはもう二度と、小学校のグラウンドをさまようことはないだろう、と。

## 第四章 『逃走中』 ハンターはハンニン（犯人）

）

### 第四章 春 『逃走中』

ハンターはハンニン（犯人）

三月十九日水曜日は小学校の卒業式で、マキもミサもヒナもナホもみんな涙ぐんでいた。(そりゃそうだよな)と、トオルは思った。今まで十二年間生きてきて、そのうちの半分をこの小学校で過ごしたんだ。これからは、もう来なくていい、ていうか、来てはいけないんだと思えば…誰だって悲しくなるだろう。卒業式を終えて教室に戻ると、担任の雄太先生はチョークを手に取った。黒板の真ん中には、このクラスの生徒の『贈る言葉』が赤・黄・白のチョークで書いてある。「六年生のみなさん。卒業おめでとう。そして、五年間お世話になりました。ありがとうございます」。雄太先生はその横を少しあけて、「春分の日」と大きく書いた。それから向きを変え、クラスの全員をぐるりと見まわしてから熱く語り始めた。

「立派な卒業式ができました。みんな、ご苦労さまでした。今までここで五年間一緒に過ごしてきた先輩たちが、これからはいなくなると思うと寂しい限りですが、しかたがありません。卒業生はこれから中学校という新しい舞台で大いに頑張ってくれと思います。」

さあ、次は、いよいよキミたちの番だ。明日、三月二十日は春分の日です。昼の長さよ夜の長さがほぼ同じで、この日を境に、これから夜より昼間の時間が少しずつ長くなっていく。校庭の桜も、まもなく咲き始めるだろう。四月になって満開になれば、新しい学年が始まってキミたちは六年生になる。小学生最後の一年だ。みんな、気持ちを引きしめよう」

つまり、あと五日で自分たちの五年生は終わり、春休みになる。そして、休みが明ければ六年生になっていて、楽しい小学校生活も残りあと一年になるのだ。そう考えると、トオルは寂しくなった。

そんな春分の日の午後、トオルは水灌公園に駆けつけた。全員集合の約束だ。小学校の卒業式は終わったが、マキもミサもヒナもナホも来た。もちろん美加もいる。

公園でのイベントは言うまでもなく「ボール当て遊び」だ。今、小学生に圧倒的な人気を誇るテレビ番組『戦闘中』をマネしたものだ。もう一つの人気番組『逃走中』の要素も入っている。この「ボール当て遊び」は何時間経けても飽きることがない。互いに追いかけて逃げまわり、公園内を夢中で走りまわる子どもたちは、みな時間を忘れてしまう。

それでも、さすがに西の山に夕日が沈む頃、女子はみんな帰った。だが男四人は、なおも、ねばって大声でわめきながら走りまわっていた。やがて、夕闇が広がってきて、公園には四人のほか誰もいなくなった。達也が兄から借りてきた腕時計をのぞいて叫ぶ。

「やべえ！ 六時半過ぎた」

「帰るか」

「ママに叱られるぞ」

バイバイと、みんなと別れ、達也とトオルは歩いて帰りを急いだ。公園を出てしばらく行くと、林の向こうから悲鳴があがった…ような気がした。達也が振り向く。

「おい、今のなんだ？ 悲鳴か」

「みたいだな。林の向こうだ」

達也とトオルは畑の中の細道を走って林まで行って見た。林の先の道路の向こう側には塀に囲まれた立派な二階建ての家が立っていて、門の手前には汚れた小型トラックが一台止まっている。ナンバープレートは泥で汚れていて読めない。

トオルと達也は運転席に近づいて門の中をのぞいた。と、家の中から目出し帽をかぶった男二人がと

び出して来た。「やべえ！」と、小さく叫んだ達也は、さっと向きを変えトラックのうしろに隠れたが、逃げ遅れたトオルは相手と真正面から向き合ってしまった。

「わっ！」

トオルは、あわてて林に向かってダッシュした。

「追え、逃がすな」

トオルはハンターに追われる逃走者のような気持ちになって全速力で走った。だが、途中からグンと加速したハンターのひよりはトオルに追いつくと、うしろから跳びついた。トオルはハンターに抱きかかえられて転がった。ハンターはトオルをかかえあげると、獲物を捕まえたような得意げな顔でうしろを振り返った。駆け寄ってきたもう一人が、トオルを抱きかかえるハンター、じゃないハンニン（犯人）の顔を指さして叫んだ。

「あっ、おまえ。いつ目出し帽とったんだ」

トオルを抱きかかえていた男が、一瞬ハッとして右手で自分の顔をさわる。

「あっ…さっき、あのうちから出たとき息苦しかったんで、とって、そのままだ」

「ばか。顔を見られたじゃねえか。このドジ」

目出し帽をかぶった男は、ドジな相棒の頭をパシッとたたいた。

「あ痛っ」

「ばかやろう。クルマに戻るまでとるな、って言っただろうが」

「すんません。またすぐかぶるつもりが、あわててこいつを追いかけたんで」

「ばかか、ったく…どうすんだ。この…」

「すんません」

ドジなハンターはトオルを左手でつかまえたまま、右手で尻ポケットから帽子をとり出すと、かぶりなおした。

「とりあえず、ガキの口をふさいで手足をしばれ」

トオルは粘着テープで口をふさがれ、両手両足もグルグル巻きで固定された。

「で、どうします？」

「どうする？ って、しょうがねえだろ。おまえの顔を見られたんだ」

「すんません」

「山へ運んで捨てるんだ」

「捨てる？」

「そうだ。しゃべれねえようにしてからな」

「しゃべれねえようにして、って…ま、まさか？」

「ほかに方法があるか」

「だけど…そればかりは、ちょっと…」

「ばかやろう。甘ったれたことを言ってるんじゃないねえ。おまえは顔を見られたんだ。やるしかねえだろ。でなきゃあ、こっちが危ねえ」

「だけど…」

「ばか、おまえのせいだぞ。おまえが、あわてて目出し帽をとるからだ」  
「すみません」

「それに、おまえがさっき殴り飛ばしたジジイだって、死にそんな悲鳴をあげてたじゃねえか。あれじゃあ、今頃、くたばってるかもしれないねえ。いいか。一人やるも二人やるも同じだ。ビクビクすんな」

「えっ、そ、そんな」

「とりあえず。そいつをトラックの荷台に乗せて、なんかかぶせておけ」

ドジなハンターは、トオルを肩にかついでトラックまで運ぶと荷台に転がし、横にあった汚いシートをかぶせた。

運転席のドアの閉まる音がしてトラックが動き出す。と、誰かが荷台に飛び乗ったような気配がした。しばらくすると、シートがそつとめくられた。ギョツとして、トオルは目をつむった。

「トオル。おい」

と、ささやく声に驚いて目をあけると達也の顔があった。「ぐっぐっ、うぐぐっ」、トオルは粘着テープで口をふさがれた顔を起こして上下に振った。達也が粘着テープを勢いよくピツとはがす。「うっ」と、うめき声をあげるトオルの口を「ばか、声出すな」と達也はおさえた。両手両足の粘着テープもはがすと、達也は腹ばいになったまま低い声で言う。

「起き上がるな。トオル。横になったままで聞け。いいか、信号待ちで止まったら、おれが合図するから飛び降りて逃げるぞ」

「わかった」

「よし、ずっと先に信号が見える。信号待ちで飛び降りるぞ、いいか……もうすぐだ」

と、達也がささやく。トオルは体をずらし腹ばいに向きを変えて身がまえた。

「……ダメだ。信号は青だ」

と、達也が、がっかりした声を出す。

運転が荒いのかトラックが古くてガタがきているのか、舗装道路でもトラックはガタガタ揺れて体があちこちに当たる。達也がまたささやく。

「また信号だぞ。よし、今度は良さそうだ」

突然、トラックがスピードをあげる。体が荷台に重ねて乗せてある板にゴツゴツぶつかる。

「くそっ、黄色で突っこんで、赤信号を走り抜けやがった」

達也がくやしそうにつぶやく。トラックは北へ進んでいるようだ。しばらく走ると、トラックは大きく左にカーブを切って横道に入った。狭くて暗い木立の中の坂道をくねくねとのぼって行く。道に張り出す小枝に当たりながら、トラックは、なおも進む。

「山の中だな」

トオルがつぶやくと、達也はトオルの背中をそつと叩いてささやく。

「飛び降りるか？」

速度はそれほど出でないが、それでも走行中のトラックから飛び降りるのはリスクが高すぎる。トオルは声をひそめてこたえた。

「いや、飛び降りて足なんかくじいたら、あと逃げられない。止まってからだ」

道路の右側は山で、左側は雑木の坂になっている。いつの間にか月が昇ったが、半月よりもっと欠けた月の光は、空に広がる雲にさえぎられて弱々しく、時おり、あたりは真っ暗になる。トラックは、さらに進んでいって、やがて停止した。

「止まった。行くぞ。それっ！」

トオルと達也はトラックの荷台から飛び降りると、のぼって来た坂道を全速力で走った。うしろで運転席のドアを開ける音がある。外に出た二人の男の声が聞こえてくる。

「あれっ、ガキがいねえぞ！」

「そんな、ばかな」

「あ、あそこだ。な、なんだ。二人いるじゃねえか。どういうこった？」

「うそ？」

「追え。逃がすな」

二人のハンターがダッシュして追ってくる。目の前のカーブを左にまわったトオルと達也は、右側の雑木林に飛びこんだ。暗い茂みの中に隠れたトオルは全神経を目と耳に集中させる。走る二人の足音が目の前の坂道を通り過ぎて行った。そして、少し行った先で立ちどまったようだ。二人の声が聞こえる。

「おかしいな」

「そんな遠くまで行ってねえはずだ」

二人は坂道を歩いて戻ってくる。トオルと達也は、暗やみの中に、はいつくばって息をひそめた。

「このあたりに隠れているじゃないですかね」

「だろうな。おい、トラックの中に懐中電灯が入れてあったな」

「え？ あ、はい。確か、二、三。作業用のやつが…とってきますか」

「そうだな……いや、いい」

「じゃあ、どうするんです？」

「こんな暗がりの中を、行き当たりばったりで探してたって見つかりやしねえ。ここは、いったん引き上げて、あしたの朝、明るくなったら戻って来て探し出すんだ」

「ああ、その方がいいですね」

二人はトラックまで戻ったようだ。トオルと達也は暗やみの中でじっとして動かなかった。やがて、ヘッドライトの光の輪が暗い坂道を照らし、トラックがゆっくり通り過ぎて行った。

「達也、だいじょうぶか」

「あちこち擦りむいているけど、だいじょうぶだ。おまえは？」

「背中が少し痛むけど、たいしたことない。ともかく、この山道をくだって広い道に出よう。広い道ならクルマが通るだろう。止めて乗せてもらおうんだ」

「そうか。ヒッチハイクだな。はは」

達也の笑い声が引きつっている。トオルと達也は暗い坂道を中心にしながら歩いて下った。曲がり角に差しかかるときは、犯人たちのトラックが待ちかまえてないかを確認してから進んだ。心細くて泣けてきそうだったが、こんな時間にこんな山の中に人はいないだろう。誰も助けてくれない。がんばって広い道まで歩くしかない。

「なあ、トオル。あいつら、おれたちをつかまえたら、どうするつもりだろう？」

「殺すんだって。山へ運んで殺す…って、さっき二人で話してた」

「マジか」

「おれたちは強盗の目撃者だからな。おれなんか、ひとりの顔、まともに見ちゃった」

「おれはチラッとしか見てないけど……」

「え？ チラッとでもダメだろ」

「やっぱダメか……あ、なんだ？ トオル。おまえ震えてるぞ。怖いのか」

「え？ あ、いや。おれたちハンターに追われる『逃走中』みたいだな、って思ったらワクワクしてきたんだ」

「嘘つけ」

「はは、ホントはちょっと寒いんだ。それに腹が減った」

「確かに。ちょっと寒いし腹も減ったな」

「達也は思いたしたように左手の腕時計を確かめた。」

「あれ、もう八時過ぎか。ああ……腹減ったア。ノドも乾いたよオ」

「なあ、達也。おれたち、まだ十一年しか生きてない」

「だよな。くそ、十一歳で死んでたまるか」

「あんなやつらに殺されてたまるかだよな。よし、達也。逃げ切るぞ」

「よっしゃー」

と、声をあげた達也は腕をグルグルまわした。

「トオル。腕をグルグルまわすといいぞ。あつたまる」

「お、そうだな」

達也とトオルは両腕をグルグルまわしながら、ゆっくり坂道を下りた。やっこの思いで広い道との合流点に到着したときは、二人ともへとへとだった。トオルと達也は道路の脇に立ってクルマの来るのを待った。

「おい、来たぞ。クルマ」

「よし！」

達也とトオルは道路にとび出すと、ヘッドライトの光に向かって両手を振った。クルマが速度を落とすに近づいてくる。目の前に止まった。止まったクルマを見てびっくりした。

「わっ、さ、さっきのトラックだ。逃げろ！」

トオルと達也は道路から雑木林の斜面に飛びこんだ。「わっ」、飛び込んだところは坂になって二人は転がった。あわてて小枝をつかもうと手を伸ばしたが、つかめない。ズズズズズー、暗やみの中を滑り落ちる。そして、なにかに当たって止まった。暗がりに目がなれたせいか、かすかな月明かりでも、当たったものがなにか分かった。丸太だ。切り出された丸太が数本横たわっている。トオルは、あわてて達也を探した。

「達也、どこだ？」

「ここだ」

「わっ」

すぐ隣で返事がしたので、トオルは息が止まりそうなほど驚いた。そして、涙が出そうなほどうれしかった。

「ああ、びっくりした。達也、だいじょうぶか」

「だいじょうぶだ。おまえは？」

「うん。また、ちょっと擦りむいたけど、だいじょうぶだ」

二人は丸太の上から首を出して下をのぞいた。下は、さらに急な坂になっているようだ。振り返ると、雑木林の上の方から懐中電灯の小さな光が二つ、ちらちら揺れながら近づいてくる。達也が声をひそめる。

「やべえぞ。どうする」

トオルは、いいことを思いついた。

「達也、この一番前の丸太を押し下へ滑らそう」

「え？」

「おれたちが滑り落ちたと見せかけるんだ」

「あ、そうか：よし」

「丸太と一緒に落ちるなよ。いいか、いくぞ、せーのー、それ！」

ズズズズー、丸太が音をたてながら、ゆっくり滑り落ちていく。トオルと達也は急いで横へ移動し、暗やみの中に身をひそめた。丸太が滑り落ちたあたりを懐中電灯の光が追う。

「おい、あそこだ！」

「あっ」

「下だ。滑って下へ逃げやがった。追え！」

「あ、はい」

懐中電灯の光が激しく揺れる。

「おっとと、と。あ、危ねえ」

「と、と、と。す、滑るっ。と、と」

暗い茂みの中で懐中電灯の光が上下左右に激しく揺れる。「わっ！」「わわわっ！」と、小さな叫び声をあげた二人はズズズズーと滑り落ちていった。トオルと達也は暗やみの中で顔を見合わせハイタッチすると、まわりの木の枝をつかんで体を持ちあげ、腹ばいになって坂をよじのぼった。やっこの思いで道路まではいあがったトオルは達也に向かって叫んだ。

「走って逃げるぞ」

「ちょっと待て」

達也はトラックの運転席の中をのぞくと、ドアを開けて中に入った。トオルも中をのぞいた。

「おい、なにしてるんだ」

「ははは、これこれ。あいつら、キーを差したままだよ。昔のクルマは、ここにキーを差して回さないとエンジンがかからないんだ」

運転席からおりた達也は、抜き取ったクルマのキーをトオルに見せると雑木林の暗がりの中に放り投げた。それから、二人は走って逃げた。少しでも早く、少しでも遠くへ犯人たちから離れたかった。しば

らく真剣に走ってから、トオルは達也に声をかけた。

「間一髪だったな」

「ああ……だけど、あいつら、今日は帰って、あしたの朝来るとか言ってなかったか」

「言ってた。たぶん、わざと大きい声で、おれたちに聞こえるように言ったんだ。おれたちをだまして広い通りまで来させて、ここで捕まえようと待ち伏せしてたんだ」

「ああ、そういうことか」

うしろから、クルマのヘッドライトが見えた。二人は道のわきに隠れた。達也が不安そうにトオルを見る。

「ま、まさか、あのトラックじゃないだろな……どうだ？」

トオルは、目を凝らしてクルマの車種を確認した。

「だいじょうぶだ。トラックじゃない。ふつうの乗用車だ」

うれしくなった二人は道路のまん中にとび出して手を振った。クルマは速度を落として近づいてきた。と、突然クラクションを鳴らして加速すると、二人に向かって突っこんできた。

「うわっ！」

「あ、危ねえ！」

二人は、あわてて横へ逃げて転がった。立ち上がった達也が走り去る車に向かって叫ぶ。

「ば、ばかやろう。人殺し！」

「達也、だいじょうぶか」

「な、なんだ、あのクルマ！」

「危なかった。もうちょっとで、ひかれるところだった」

「だけど、なんで？ ……なんで、おれたちに向かってきたんだ？」

「なんでだろ……びっくりして、怖くなったのかな？」

「怖くなったア、なんで」

「だって、こんな山の中で、こんな時間に暗やみの中からいきなり子どもがとび出して来たんだ。だれだって怖がるよ。えっ、なんだ？ よくわからんけどクルマを止めるとやばいぞ、みたいにパニックって逃げたんだよ。きっと」

「それかア……くそっ。おとなのくせに。臆病もの。ばかやろう」

「しょうがない。達也、もう少しがんばってもっと広い道に出るまで走ろう。クルマがたくさん通っている道路に出ればなんとかなる」

「そうだな」

二人がゆっくり走り始めると、今度は前からヘッドライトの光が見えた。そして、ヘッドライトは走る二人の全身を照らした。喜んだ二人は、今度は道路の中央へはとび出さず脇で手を振った。だが、クルマは速度を落とさず、そのまま横を通り過ぎて行った。二人は道路の中央に走り出て手を振った。

「待って」

「止まってえ」

「止まれ。止まってくれー」

「止まれえー……くそっ、なんで……なんで、みんな、止まってくれないんだ」

とうとう達也は涙声になった。それでも、あきらめきれず、達也とトオルは、そのまま立ちどまって通り過ぎたクルマをじっと見ていた。と、そのときブレーキランプの赤色がパッと広がって、速度を落としたクルマは、くるりとユーターンした。

「あっ！」

「わっ。も、戻って来る！」

「戻ってくるぞ。達也！」

「やった！」

トオルも達也もうれしくなって跳びあがり、両腕を思いきり振った。近づいてきたクルマが速度を落とし横に止まる。ブルブルルル、運転席の窓ガラスがスーと下がって若い男の人が顔をのぞかせた。助手席には若い女の人が出て、不安げな顔をトオルと達也に向ける。

「こんなところで何してるんだ。キミたち小学生か？」

「あ、はい。ボクたちハンターに追っかけられているんです」

「え？」

「あ、ち、違います。ボクたちハンニン（犯人）に追っかけられているんです。事件に巻き込まれたんです。強盗です」

「事件に巻き込まれた？ ま、ともかく中へ……クルマに乗れ」

クルマの後部座席に乗り込んだトオルと達也は、強盗を目撃し、つかまってトラックでここまで連れてこられたが逃げ出したことを話した。男の人は、よし！ と声をあげると思いきりアクセルを踏み込んだ。

「警察署へ直行だ」

「あ、あの、その前にスーパーのフィーオン近くの交番までお願いします。知り合いのおまわりさんがいるんです」

交番で、トオルと達也は山内巡査部長と高下駄巡査に今までのことを話した。二人が目撃した強盗事件は被害者の老夫婦から通報があり、すでに捜査が入っていた。夫婦二人は粘着テープで口をふさがれ手足も縛られていたが、何度かけ直しても電話に出ないのを不審に思った近くに住む娘さんに発見されたのだそう。現金二〇〇万円と貴金属を奪われ、犯人と戦った七十八歳の爺ちゃんは殴られて全治一か月の重傷を負わされたが、婆ちゃんにケガはなかった。それを聞いて達也もトオルも体が震えた。あのまま犯人につかまっていたら、今頃、殺されていただろう。

「で、キミたちは、二人組の犯人がまだそのあたりにいるはずだと言うのかね」

山内巡査長に聞かれて達也が得意げにこたえる。

「はい。僕がとっさに思いついてキーを抜きとり林の中に投げ込んだから、あいつらはトラックを動かさないはず」

トオルもつけ加えた。

「もしかしたら、犯人たちは崖を滑り落ちたとき足をくじいて動けないかもしれません」

「よし、わかった」

トオルと達也にうなずいた山内巡查長は電話機を取ると本署に連絡し、事情を説明し指示を仰いだ。

「はい。ええ、わかりました。では、待機します」

受話器を置いた巡查長は高下駄巡査を見た。

「オッケーだ。この子たちに協力してもらってもよいと本署の了解を得た。すぐにパトカーで応援を回してくれるそうだ。この子たちの家に連絡して、協力の了解を取りつけてくれ」

「はい」

高下駄巡査は二人の家に電話して事情を説明すると、

「ええ、もう少しだけ協力してもらいますが、終わったらパトカーで家まで送り届けますので心配しないでください」

と伝えた。それから、走って隣のコンビニへ行き、おにぎり四個とペットボトルのお茶を二本買ってきてくれた。

「二人とも、お腹がすいただろ。さあ、食べなさい。だけど、本署からすぐパトカーが来るから少し急いでね」

達也は目を輝かせて机の上のおにぎりを一つずつ確かめる。

「シャケとツナマヨにシーチキンと明太子。トオル、おまえ、どれとどれがいい」

「いいよ。おまえ、好きなのとれ」

「マジか？　じゃあ、おれはツナマヨと明太子」

二人は、おにぎりをががつ食べて、ごくごくお茶を飲んだ。メチャメチャうまい。生まれてから今まで食べた中で一番おいしいおにぎりだった。マジで。

「外は寒いだろうから、ちょっと大きいけど、これを着て行こうか」

と、高下駄巡査がジャンパーを貸してくれた。紺色のジャンパーは背中に黄色の横文字で「POLICE」と書かれている。テレビニュースでときどき見かける犯行現場を調べる鑑識などが着ているあの紺色のジャンパーだ。ジャンパーをおったトオルと達也は身震いした。寒いからではない。緊張したのだ。

やがて、パトカーが三台到着した。トオルと達也は先頭のパトカーに乗った。警察に保護されてパトカーに乗せられたわけではない。捜査員の一員として、刑事や警官を犯人のところへ案内するのだ。そして、今から、強盗犯二人を逮捕する瞬間に立ち会うのだ。むふふ、いったい、この世の中にそんな学生がいるだろうか？　はははは、パトカーの中の二人の気分は最高だった。

パトカーは二人に案内されて現場に到着した。ところが、そこにあるはずのトラックが見当たらない。リーダー格の口ひげを生やした私服の刑事が、ポケットに手をつ突っ込んだままアゴで道路を指し示しトオルと達也を見た。

「キミたち。本当に、ここかね？」

「あ、はい。ええ、ここです。トラックがあったのは確かにここです。間違いありません」

「しかし、無いね」

「……変だなア……キーを抜いて、あのあたりに放り投げたから、トラックは動かさねばならないのに」

「どのあたり？」

「あの辺です」

刑事は制服の警察官に指示する。

「ちょっと、その辺を探してみる」

七人の警察官が懐中電灯で照らしながら雑木の茂みの中へ入った。しばらく探していたが見つからないようだ。

「見当たりません」

「そうか…ふむ、しかたがない。ま、トラックが無いということ、犯人たちが乗って行ったということになるな。それとも、最初から、ここには無かったか…」

「えっ？」

トオルと達也は、あせった。メチャメチャあせった。

「そ、そんな…トラックは、確かに、ここに止めてあったんです。間違いありません」

「僕たちは、この斜面に転がって落ちて、そのあと、僕たちを追ってきた犯人の二人は、その先の崖から滑り落ちたんです」

高下駄巡査が二人をなぐさめる。

「まあ、犯人はスペアのキーを持ってたんだろ」

「スペアのキー？」

「うん、予備のキー。クルマのキーはふつう二つあるんだ」

少し離れたところまで移動して山内巡査長と話していたさっきの刑事が、「ちょっと」と、高下駄巡査を手招きする。「はい」と答えた高下駄巡査が刑事に近寄る。刑事が達也とトオルをチラッと見て高下駄巡査になにか言い、高下駄巡査は「え？　いえ、それはないと思います…ええ、はい…わかりました」と、うなずいている。

なんだか、高下駄さんが叱られているような気がしてトオルは悲しくなった。そして、くやしかった。また、高下駄さんには申し訳ないと思った。達也も黙ってその様子を見ていた。

高下駄巡査が刑事に頭を下げてから、二人のところへやって来た。

「引きあげるよ。こんなに遅くなってしまった。家の方が心配しているだろう。パトカーで送るよ」

帰りのパトカーの中の二人の気分は最悪だった。まるで逮捕された容疑者がパトカーで連行されているかのようなだった。達也もトオルも、なにもしゃべらなかつた。警察の人たちも無言。誰も何もしゃべらなかつた。ひと言も。二人はすっかり打ちのめされていた。

翌日、トオルはマキに電話して事情を説明した。

午前十時、水滝公園。マキの連絡を受けて、いつものメンバーが自転車に乗って集合した。ベンチの上に立ったマキが、みんなに向かって熱く訴える。

「みんなに集まってもらったのは、きのうの強盗事件の手がかりを探し出すためなんだ。手がかりというのは古いトラックのキー。このキーは犯人逮捕の有力な手がかりになるの。早く犯人をつかまえないと、犯人の顔を見たトオルと達也の命が危ない。それだけじゃない。これが見つからないと、あたしたちが今まで築いてきた、あたしたちに対する警察の信用が一気に失われてしまう。そして、今まで、あ

たしたちの相談に乗ってくれた高下駄さんの立場もなくなる。だから、なにがなんでも、このキーを見つけないといけないんだ。みんな、いい?」

マキは、みんなの顔をぐるりと見まわすと、右の拳を突き上げ英語で力強くしめくくった。「ウイ・キャン・ドウ・イツ! (We can do it!) あたしたちは、やれるんだ!」

「イエーイ!」と、みんなも拳を突き上げた。

三月から学習塾に通い始めたマキは、ときどき英語を使う。

自転車に乗った九人は山の入り口の道路に到着した。達也がトラックのキーを放り投げたのは目の前の雑木林だ。

達也は、放り投げたキーと同じくらいのサイズのカギを家から持ってきた。そして、昨夜のことを思い出しながら、そのキーを、達也が言うには、昨夜と同じ力と同じ投げ方で同じ方向に投げた。

投げられたキーが雑木林の茂みの中に落ちる。パサッ。九人は、そのキーを探す。キーを見つけると、そこから、四方に広がりながら徹底的に調べた。みんな、四つんばいになって地面をなめるように必死で探す。だが、見つからない。マキが達也に向かって叫ぶ。

「達也、投げた方向、間違ってる?」

「うーん、そう言われてみると、ちょっと……」

「なんだ、違うのかい?」

九人は探す方向を変え、範囲もさらに広げた。

それから、十分ほどが過ぎて、いや、もっとかな? 十五分くらいかもしれない。ヒナが勢いよく立ちあがって叫んだ。

「あつた!」

ヒナはキーを持った右手を高く掲げた。

「マジか?」

達也が駆け寄ってキーを確かめた。

「うん、これだ。これに間違いない!」

「やったー」

歓声があがる。隊長のマキが拳を突きあげて叫んだ。

「ウイ・デイドゥ・イツ! (We did it!) みんな、よくやった!」

「おおー」

自転車に乗った九人は、そのまま水滝交番に駆けつけた。

「高下駄さん。キーを見つけました」

マキが勢い込んでキーを差し出すと、デスクの椅子に座る高下駄巡査は、なにそれ? というような顔でマキを見た。マキが語気を強める。

「強盗犯のトラックのキー。達也が投げたキーです」

「達也くんが投げたキー? ああ、あれ」

高下駄巡査はキーを受け取ると、目の前に近づけて刻まれた文字を確かめた。

「うん。確かに、これは古いクルマのキーだ。で、これを山の林の中から見つけたって？」

「はい。今さっき、みんなで手分けして探したんです」

「うむ……達也くんが犯人のトラックからキーを抜き取って林の中に投げ込んだというのは本当だったんだ」

達也がデスクにつめ寄った。

「高下駄さんも疑っていたんですか」

「あ、いや、そういうわけでは……しかし、それにしても達也くん。キミは、強盗犯に追われてせっぱつまった逃走中に、よくそんなことができたな。たいしたもんだ」

ほめられて、達也はうれしそうに頭をかいた。

「いえ、まあ、僕は……逃走中でも、どうしたら逃げ切れるか、いつも考えながら逃げてるんで……」

「え？ いつも……」

「あ、いえ。それは『逃走中』っていうボクたちの遊びのことで。今、ハマってるんです」

「あ、そう……ま、なんにしても大したもんだ。よし。じゃあ、自分は今から本署に行って、このキーを調べ容疑者を特定する。キミたちは帰りなさい。なにかわかったら、また、トオル君に電話で連絡する。みんな、ご苦労さま。よくやった」

事件は解決した。

高下駄巡査はキーを本署の鑑識に回した。キーからトラックの車種と型と製造年が割り出され、その販売元と販売先が特定された。やがて、トラックの所有者が判明した。そして、トラックを所有する会社の従業員の顔写真を見せられた達也とトオルは、写真の顔を指さした。

「ハンターの一人はこいつです」

警察に拘束された顔写真の男は犯行を否定したが、搜索された会社のロッカーから強盗で奪われた老夫婦の貴金属の一部が発見された。結局、男は犯行を認め、仲間の犯人についても白状した。

そして、九名の小学生が、またもマックを手に入れたことは言うまでもない。

## 第五章 郵便局強盗

## 犯人の背中を押したマキ

### 第五章 郵便局強盗

#### 犯人の背中を押したマキ

学校から帰ると、マキは教科書でずっしりと重いリュックを「よいしょ」と声に出して背中から降ろし、まだ慣れないセーラー服をジーンズとトレーナーに着がえた。それから鏡をのぞきブラシを手に取り髪をちょっとだけ整えると小型のおしゃれな水色のリュックに塾の用具を入れた。玄関で買ったばかりの淡いグレーのスニーカーをはいて外に出るとドアのカギをかけた。ママもまだ仕事から帰っていない。四月から中学生になって勉強も忙しくなった。もう、今までみたいに小学生と一緒に公園で「鬼ごっこ」とか「ボール当て」や「水風船当て」とかで遊んでいるわけにはいかない。なにしろ、「算数」が「数学」に代わって急にむずかしくなったし、英語は週四時間もあって、小学校のときのようには先生の口まねをして無邪気に「ハウ・アー・ユー？」とか「ファイン」とか言っていればすんだ授業とは違う。だから、六年生が終わる前の三月初めから学習塾に通うようになった。塾は水滝公園の近くにある。マキは習ったばかりの英語をつぶやきながら歩いて塾に向かった。

「春は過ぎた。えーと、スプリング・イズ・オーバー、だな。(Spring is over.)」  
今年春の訪れが早かった。ははは、「春の訪れ」なんて表現は小学生のときは思いつかなかった。今年春の訪れが早かったから過ぎるのも早い。入学式の当日、校庭の桜の花はほとんど散っていて木には緑の葉っぱが目立った。あれから二週間が過ぎる。生活環境の大変化で少々バテ気味だけれど、明日は土曜日だし、あと一週間もすればゴールデンウィークだ。

街路の歩道をふちどるツツジが咲いて、街を東北西三方から囲む山々はいつの間にかすっかり新緑に覆われている。ああ、緑がきれいだ。美しい。中学生になったからだろうか。小学生の頃には気がつかなかった自然の美しさや、季節の移りの新鮮さに「おやっ」と目がいくようになった。やっぱ違うなア中学生は……ははは、年頃なんだ。

「アイ・ウイル(I will)、えーと、フォーリン・ラブ。(I am in love.) はは、そのうち、あたしは素敵な恋をするだろう。あたしのお相手は、どんな男の子だろ？ むふふふ……」  
マキが妄想をふくらませて歩いていると、突然、うしろから声をかけられた。

「マキ、どこへ行くの」  
甘い妄想をぶち破られて、マキは振り向いた。

「な、なんだ。誰かと思ったら達也にトオルか……塾だよ。ジユク。キミたち、今から公園？」

「うん。公園で『ボール当て』」  
達也とトオルは、それぞれ手にした数個のボールをマキに見せる。

「いいなア、小学生は。無邪気で」  
「この頃、マキは公園に來ないね。明日の土曜、昼から公園に集まって、みんなで遊ぶけど、マキも來ない？」

「あのねえ、キミたち。言っとくけど、あたしはもう公園でキミたちとつるんで遊べないの」  
「えっ、なんで？」

「なんで、って……中学生のくせに、あいつ、まだ、小学生を集めて公園で遊んでるぞって、みんなから白い目で見られるの」

「白い目で見られる、って？」  
「ばかにされるってこと」

「ふうん」

「あのね。それから、もうひとつ。あたしのこと、これからマキ先輩と呼んでね。マキさんでもいいけど呼び捨てはやめて。小学生の仲間みたいだから」

「えっ？」

「じゃあね」

塾が始まる午後五時少し前、マキは塾の近くにある郵便局へ急いだ。朝、会社に出かける父親に頼まれて封書を簡易書留で出さなきゃいけない。郵便局の窓口は五時に閉まる。

（ふう、間に合った！）

小さな支店の郵便局の中は静かだった。営業終了間際の客はマキだけだった。カウンターの二つの窓口の中には、それぞれ女性の局員がひとりずつ、奥のデスクには局長の中年男性がいて、三人ともまわりを片付け閉店の準備に取りかかっている。マキは郵便の窓口に歩み寄り、父親に頼まれた封書をカウンターの上に置いた。

「これ、簡易書留でお願いします」

「簡易書留ですね」

窓口の女性局員が封書をハカリに乗せる。

「四百四円になります。こちらの差出票に記入をお願いします」

そのとき、マキの背後で、入り口の自動ドアが開く音がした。

「動くな。手をあげろ。おかしな動きをすると撃つ」

「えっ？」

マキは一瞬、何が起こったか理解できず、恐る恐るうしろを振り向いた。目出し帽の男が黒の皮手袋をはめた手で猟銃のようなものをかまえている。男はカウンターの中の三人に銃を向けた。

「みんな、その場に立て！ 両手をあげたまま動くな。手は上だ！」

驚いた三人の郵便局員が手をあげて、その場に立ちあがった。そのとき、足音がして入り口のドアが開いたが、「わっ！」と叫んだ男の人は、あわてて向きを変え走って逃げた。振り向いた猟銃男は「しまった！」と声をあげたが、向き直ると黒のバッグをカウンターのの中へ放り投げた。

「ありったけのカネを、その中へ入れろ」

「あ、あ…は、はい」

局長はバッグを拾おうとしゃがみ込んだが転んで、そのまま床から立ちあがらない。

「急げ！」

「あ、は、はい」

「何してるんだ！」

「こ、腰が抜けたみたいで…ああ…お、起きあがれません」

「ふざけるな！ 早くしないと、ぶっ殺すぞ！」

「ホ、ホントです。動けません」

「ば、ばかな」

猟銃男は窓口の女性に向かって叫んだ。

「おい、おまえ。うしろのバッグを拾ってカネを入れろ！」

「局長でないと金庫は明けられません」

「なにイ、ぐじゃぐじゃ言わずにバッグの中にカネを入れろ。早くしろ。早くしないと、こいつをぶっ放すぞ！」

男は銃を突き出して脅す。局長が女性局員に言う。

「や、山口さん。私の代わりに…カギはそこ。暗証番号は…」

「あ、はい」

女性局員はカウンターを離れて局長のところに行くところに行くと、カギを受け取り暗証番号をメモする。

「なにを、もたもたしてるんだ。急げって！」

女性局員が奥の金庫を開け、カネをとり出してバッグの中に入れる。

と、そのときパトカーのサイレンが聞こえた。

「くそっ、もう来たのか」

猟銃男は振り返ると、入り口のドアまで行って外を見た。

「ダメだ。間に合わん。くそっ」

男はもうひとつの窓口の女性局員に銃を向けた。

「おい、おまえ。こっちへ出て来い。入り口のドアをロックしてカーテンを閉めろ」

女性局員が入り口のドアをロックしカーテンを引く。

「おい、裏口はあるのか」

「あ、はい」

「裏口もロックしろ。そしたら三人ともカウンターの途中で、じっとしてろ。手は上げたままだ。変な動きをしたら撃つぞ」

それから、男はマキを見た。

「おねえちゃん。運が悪かったな。悪いけど人質になってもらうよ」

「えっ？」

「心配するな。おとなしくしていれば何もしない。背中のリュックは降ろして、そこに置け。尻ポケットの携帯もだ」

マキはリュックを背中から降ろし、携帯と一緒にカウンターのの上に置いた。カウンターの中の電話が鳴る。

猟銃男が女性局員に「出ろ」とアゴで指図する。女性局員は受話器を取り上げ、「あ、はい」と答えてから猟銃を持った強盗の男を見る。

「警察からです。中の様子を聞いています」

「よし、言ってやれ。犯人は銃を持ってる、ってな」

バンーン、突然、銃声が鳴り響いた。「キャーッ！」と悲鳴があがる。犯人が、いきなり、天井に向けて撃ったのだ。

「受話器を渡せ」

受話器をとった犯人は声を荒げた。

「クルマを用意しろ。エンジンをかけたまま入り口の前にとめて西に向けておけ。いいか、パトカーや警官は入り口に近づけるな。へたなマネをすると中の郵便局員を殺す」

受話器を耳からはずした犯人は、マキを見て「中学生か？」と聞いた。マキがうなずくと犯人は受話器を耳に戻した。

「客はひとりだけだ。中学生の女の子だ。今から、その子を人質にしてここを出る。安全なところまで逃げたら、この子は解放する。それは約束する。だから、おれを追いかけるな。追いかけたら、この子の命はない。いいな、脅しじゃないぞ。本気だぞ」

バン、「キャーッ！」

犯人は天井に向けてもう一発撃つと、ボタンを押して電話を切り受話器をカウンターの中の局員に返す。

「おい。なにカヒモはないか」

「ヒモ？」

「ガムテープでもいい」

局員のひとりがガムテープをとり出し犯人に見せる。

「それでいい。おまえ、こっちへ来い。この子の両手をうしろにまわしてテープをぐるぐる巻きにしろ」  
カウンターから出てきた女性局員は、「ゴメンね」と言ってマキの両手をうしろに回し、両方の手首を合わせるとガムテープでぐるぐる巻いた。犯人は両手首を巻いたテープの具合を確認すると局員に向かって言った。

「よし、カウンターのの中にもどって両手をあげてろ」

カウンターのの中の電話が鳴る。犯人の目配せで局員が受話器をとる。

「外にクルマを用意したそうです」

「よし、カネを入れたバッグをカウンターの上に置け」

犯人はカウンターに置かれたリュック型のバッグを手にとると、両側のストラップに腕を通して背負った。それから、マキを前に立たせ、左腕をうしろから首にまわす。右手には銃を持っている。

「おねえちゃん。悪いけど、ちょっとの間の辛抱だ。さあ、出ろ。逃げようなんて考えるなよ。逃げたら撃つぞ。いいな、ゆっくり歩け」

入り口のドアを開け、マキを前にして犯人は用心深くゆっくり外に出た。

「おっ！」

と、通りを囲む人たちから、どよめきがあがる。犯人は、まわりの警官に向かって叫ぶ。

「おかしなまねをしたら人質を撃つ！ いいか。弾はまだ三発残っている」

犯人はマキをうしろからかかえて、用意されたクルマにゆっくり近づいた。運転席のドアを開けマキを中に押し込むと、マキに銃を向けたまま「助手席に移れ」と言う。マキは、うしろ手に縛られたまま、ももぞ体を動かして助手席に移動した。続いて乗り込んだ犯人は、マキに銃を向けたままクルマを進ませた。

角を右にまがり、北に向かってスピードをあげる。マキは気を取り直してクルマの時計に目をやった。五時十分を過ぎたところだ。それから、数分走って右に曲がって左に曲がると、ひと気のない空き地に

着いた。古びた白いクルマが一台止まっている。犯人はその隣にクルマを止めた。

「降りろ。クルマを換える。このクルマには、きつとGPS発信機か何かが付いてるんだ」

犯人はマキを降ろすと、とめてあったクルマの後部座席のドアを開けた。

「乱暴に扱って悪かったな。心配するな。このクルマでもう少し走ったら降ろしてやる」

今までとは違ったやさしい声でそう言い、運転席のうしろの後部座席にマキを座らせるとシートベルトをカチッと締めた。それから、自分の背中のバッグを降ろして助手席に置き、運転席に乗り込んだ。マキの座る右の窓ガラスの下でカチャッと音がする。クルマのドアをすべてロックしたようだ。犯人は前を向いたまま、目出し帽を脱ぎサングラスとマスクをつけた。マキは運転席のルームミラーをのぞいたが、犯人の顔はわからない。エンジンが始動しクルマが動き出す。クルマは東に進んで右に曲がり、広い通りに出た。

マキは、こわくて泣きだしそうになったが必死でこらえた。もう少し走ったらクルマから降ろしてやる、という犯人の言葉が嘘でないことを祈った。それから、(がんばれ！中学生だろ)と自分を励まし、目をつむってパパやママやミサやヒナやミホのことや達也やトオルのことを考えることにした。

しばらく走っていると、運転席で着信音が鳴った。犯人が携帯をとって耳にあてる。

「はい……うん……今、お得意さんのところ回ってる。うん……だいじょうぶだ。心配ないよ……うん、もう少しかかる……え？……はい、はい、パパだよ……はい、わかったよ。パパは今日は遅くなるから、先にお風呂に入って寝てなさいよ……はい、じゃあね」

(うそっ！なに？この会話……)

犯人の声の調子がまるで別人なのに驚いたマキは、勇気を出して話しかけた。

「家族から電話？」

犯人の背中がピクッと動いた。だけど返事はない。

「ねえ、そうでしょ。家族からでしょ」

「うるさい！黙ってる」

ハンドルをぎゅっと握って前を見つめる犯人の背中が、どこか悲しそうだった。マキは恐る恐るさらに声をかけた。

「ねえ、おじさん。話しかけてもいい？」

「……おまえ、おれがこわくないのか。強盗だぞ」

「うん、こわくない。おじさんは悪い人ではなさそうだから」

「……」

「さっきの電話で分かった。おじさんは悪い人じゃない。だから、家族も心配してるんだ」

「うるさい！」

「おじさんの子どもって何歳？女の子？」

「うるさい、黙れ！」

信号待ちで犯人は助手席に置いたバッグを膝の上にのせると、上の口を開けて中を見た。それから、左手を突っ込んで札束を確認しながら「よし、これで……」と、うなずいている。

なかなか、信号が変わらない。右側の信号が青から黄色に変わる。犯人は左手をバッグの中に入れたままアクセルを少し踏み込んだ。クルマが、すーっと道路の中央まで進んだ。と、そのとき、黄色信号で左から交差点に突っ込んできたクルマが後部座席の左側に衝突した。

ドーン。衝撃で助手席のドアが開く。ガタン！

「キャーッ！」

左側のドアがマキの方へグッシャと押しつぶされる。犯人は「わっ！」と叫んでバッグから左手を抜こうと腕を勢いよく振りあげた。バッグが放り投げられたように横に飛んで助手席から外へ飛び出した。犯人はあっと叫んだが両手でハンドルを握り前を見た。ガガガガー、キキキ。クルマは斜め前に飛ばされた。クルマはガードレールをこすって向きを変え、一回転して道路の中央部をふさいだ。

そこへ、キキキキキと、タイヤをきしませクラクションを激しく鳴らして前からクルマが突っ込んできた。「キャーッ!」、ドーン。前から来たクルマは、開いた助手席のドアに衝突しバタンとドアを閉めると、そのままマキの乗るクルマの側面を擦りながら走り抜ける。走り抜けるクルマのボンネットの上でバッグが転がり、フロントガラスからルーフへ跳ね上がって空中に飛ばされた。上下ひっくり返ったバッグの口から現金が飛び散る。

「あっ！ カ、カネが」

犯人が悲鳴をあげる。風にあおられて紙幣が舞いあがる。舞いあがった紙幣が紙吹雪のように道路に舞い落ちる。

ヒーツ、声にならない悲鳴をあげて犯人はハンドルを右に切る。キキキキキ、タイヤがきしむ。クルマの左先がガッガッガッとガードレールにあたる。

「うわっ！ わわわっ」

後部座席のマキは後ろ手に縛られた体を動かそうと必死でもがいたが、シートベルトで固定されて動かない。

キキキキキ、犯人はアクセルを踏んだまま必死でハンドルを操作する。ガクン……クルマは走行車線に沿って体勢を立て直すと、そのまま前へ突っ走った。うしろでは、叫び声や怒鳴り声が飛び交っている。クルマはスピードを上げた。

「くそっ！ くそっ！」

犯人は怒りの声をあげ、マスクを口から引きはがして横に投げ捨てると、右のこぶしでハンドルを何度も叩いた。そのまま十分くらい走っただろうか。いや、五分も過ぎてないのかもしれない。恐怖で、マキの体はぶるぶる震えたままだ。「あ、ああああ」、声も震えている。クルマはさらに走る。しばらくして、少し落ち着きを取り戻したマキは、呼吸を整えてから運転席に声をかけた。

「ねえ、おじさん。これから、どうするの？ おカネ、全部、飛んでっちゃったよ」

犯人はサングラスをはずして助手席に放り投げると、その手で顔をぬぐった。背中が小刻みに震えている。

「ねえ、おじさん、泣いてるの」

犯人の背中が震えはとまらない。

「今度は、あたしを誘拐して、あたしのパパに身代金を請求するの？」

「……」

「ねえ、あたしを家に帰してよ。パパやママのところへ帰してよ。パパもママも、あたしのこと心配してるよ」

犯人は消え入るような声でつぶやく。

「黙れ……」

「おじさんの家族だって、おじさんのことを心配してるよ」

「黙れ……」

犯人はハンドルに頭を打ちつける。クルマがセンターラインをはみ出る。

「あ、危ない！」

プア・プアーン、とクラックションを鳴らして対向車が迫る。ハッと顔をあげた犯人は、あわててハンドルを左に切り対向車をよける。キキキキー。ハンドルを戻し、ふっ、と息を吐いた犯人はうしろをふり返る。マスクもサングラスもはずした顔はとても悲しげだ。

「黙れ、頼む。黙っててくれ……お願いだ。頼む」

マキは黙った。前を向きハンドルをぎゅっと握った犯人の背中が震えたままだ。夕暮れの街並みが後部座席の窓のうしろへ流れていく。犯人は静かに泣いているようだ。マキは気を取り直して、また、そつと声をかけた。

「ねえ、おじさん。聞いていい？ どうして、おカネがいるの」

犯人は低い声でこたえる。

「……借金だ。明日までに借金を返さないと家族が危ない」

「えっ……借金で家族が危ない？ ……そんなこと、今の時代はないよ」

「子どもにはわからん。悪い人から金を借りたんだ」

「警察や弁護士に相談すればいいじゃん。悪い人からおカネを借りたからって家族がひどい目に合うなんてことないよ」

「……警察も弁護士も……助けにはならん」

「おカネなんか、また働いて稼げばいいじゃん」

「そんな……子どもにはわからん」

「ねえ、おじさん。こんなことしてたって、もう逃げられないよ。無理だよ」

犯人は手で顔をぬぐい、前をじっと見つめる。

「ねえ、おじさん。おじさんは強盗はしたけれど、誰も傷つけてないじゃん。今、自首すれば罪はうんと軽くなるよ」

「……」

「やり直せばいいじゃん。今なら遅くないよ。まだ間に合うって」  
クルマの速度がガクンと落ちる。

「ねえ、おじさん。もう、やめた方がいいよ。こんなこと……家族が悲しむだけだよ」  
肩を震わせて犯人がうめく。

「うっ、うっうっ……」

前方に小さな公園が見えてきた。街路灯に照らされたブランコが、闇の中にやさしく浮きあがっている。

「ねえ、おじさん、あの公園で止めて。トイレ」

「逃げるのか」

「違うよ。ほんとにオシッコだって」

犯人は車を止めた。小さな公園には誰もいない。運転席から降りた犯人は、後部座席のドアを開けシートベルトを外してマキを降ろすと、うしろ手のガムテープをはずし、やさしい声で言った。

「ごめんな。痛かっただろ。もう、いいよ。もう、いい……逃げていいよ」

マキは黙って公園のトイレに駆け込んだ。

トイレから出てくると、闇の中で街路灯の白い光に照らされた犯人が、ブランコに腰をおろしてうなだれている。首をガクンと前に折り曲げたまま動く気配がない。

（今なら逃げられる。このまま、ここから逃げるべきだ。どこかの家に駆けこんで助けを求めればいい）と、マキは考えたが、なぜだかそんな気になれなかった。それにしても、犯人はなにしているんだろう。ブランコに腰をおろし、うなだれたままピクリとも動かない。

（ま、まさか？ ……死んではないよね……）

マキは、うしろから近づく犯人の背中をそっと押してみた。ブランコが揺れる。犯人が顔をあげる。顔をあげ前を向いたままブランコの鎖を両手でつかんだ。それから、ぼそっと何かつぶやいた。

「やり直す、か……」

そう聞きとれた。マキは、揺り戻ってきた犯人の背中をもう一度、今度は強く押してやった。ブランコが前方に揺れて戻る。

「やり直す。それしか……」

今度はハッキリ聞こえた。犯人は地面に足をつけて立ちあがると、振り向いてマキを正面から見た。マキは思わず後ずさりした。

「おねえちゃん、帰ろう。おねえちゃんの家の近くまで案内してくれるか」

「えっ？」

「もう帰るんだよ。おねえちゃんのパパやママのところへ」

そう言うと、犯人は止めてある車に向かって歩きだした。マキはブランコのうしろに立ちどまったまま迷った。犯人の言うことを信じていいのか、逃げた方がいいのか。

運転席のドアを開ける音がする。犯人はドアノブに手をやったまま振り返ってマキを見た。マキがクルマまで来るのを待つその表情や姿に不自然さは感じられず、嘘をついているようには見えない。この人物が銃で脅しておカネをとろうとしたあの時と同じ人物だとはとても思えない。決心したマキはクルマまで走ると、黙って後部座席に乗り込んだ。

家の近くまで道を案内してきたマキは、運転席に声をかけた。

「その角の手前で止まって。そこから先は歩いて帰る。家のまわりには警察の人とかが、いると思う」  
「おねえちゃんはやさしい子だな」

犯人は曲がり角の手前でクルマを止めた。人通りはない。マキはクルマから降りて運転席を見た。犯

人も降りてきてマキに頭を下げた。

「おねえちゃん、こわい思いをさせて悪かったな。申し訳ない。許してください。おじさんは、おねえちゃんに言われて目がさめた。バカなことをしたよ。今さら遅いけどやり直すことにした。ははは、おねえちゃんに背中を押されたんだよ」

「だいじょうぶだよ。やり直せるよ。おじさんは誰も傷つけてないし、人質だってこうして家まで送り返したんだから。そのこと、あたし警察にちゃんと言うから」

「ありがとう……あのね、おじさんの子どもは今年から小学一年の女の子だよ。とっても素直でやさしい子なんだ。こんな父親でかわいそうになあ。だけど、おじさんは、もう、逃げないことにした。おねえちゃんに言われたように、今からこのまま警察署に行って自首する。約束するよ」

犯人は運転席に乗り込んだ。クルマは向きを変え、ゆっくり進む。マキは、その場に立ちつくして走り去るクルマを見ていた。

犯人の子どもの小学一年の女の子は、この先どうなるんだろう？ ……幼い女の子は父親の身に何が起こったのか理解できるのだろうか。父親の犯した罪を知ったとき、どれほど悲しむだろう。幼い子が泣き悲しむさまを……心の中に思い描いてしまったマキは涙ぐんだ。犯人のクルマが、交差点の手前でブレーキをかける。テールランプの赤色が濃くなって、パツと広がり、涙でにじんでマキの頬を伝わった。それから、交差点の雑踏にまぎれてクルマは見えなくなった。それでもマキは動かなかった。犯人が自首するまで動いてはいけない、と思った。

どれほどの時間が過ぎたのだろう。夜空を見上げると、真っ暗な闇の中で小さな星がひとつ消え入りそうな、かすかな光で瞬いている。犯人は無事に自首できたのだろうか。

マキは涙をぬぐうと向きを変え、ゆっくり歩いた。ゆっくり歩いて角を曲がると急ぎ足になり、それから走った。悲しい気持を振り払おうと、マキは思い切り走った。

家の前には赤色灯を点灯させたパトカーが一台止まっていて、まわりには人が群がっている。その群れの中から、ミサがマキを見つけて声をあげた。

「あっ、マキだ」

ミサとヒナとナホが振り返る。

「うそ！」

「ほんとだ、マキだ！」

達也と健太と壮太とトオル、それに美加。みんないる。みんなが叫ぶ。

「マジか？」

「マキ、いや、マキ先輩！」

「マキちゃん」

と、美加がマキに跳びつく。

達也が心配顔でマキの顔をのぞきこむ。

「マ、マキ先輩、だいじょうぶすか？ 犯人に変なことされなかった？」

「ばか」

マキは達也の頭をパシッとたたいた。

「あ痛っ」

トオルに知らされて、パパとママが家の中からとび出して来た。

「マキ、無事か？」

「マキちゃん」

マキはママの腕の中に飛びこんだ。

人群れの中から「おおっ」と、どよめきがあがる。

「よかった。無事だ。よかった、よかった」

と、人々が口々に叫んでマキを取り囲む。カメラのフラッシュがたかれる。報道記者が数人、次々に質問を浴びせる。

「犯人は？ 犯人はどうしました？」

「マキさん、マキさん。ひと言お願いします」

「銃は？ 銃はどうなったんですか？」

「犯人は逃走中に事故を起こして負傷者も出たようですが、マキさんはだいじょうぶなんですか？」  
まわりを囲む人々から驚きの声があがる。

「えっ、負傷者が出たア？」

「犯人が発砲したのか？」

「発砲した？ だれか撃たれたのか？」

「だれが撃たれたんですか。警察官ですか、ふつうの市民ですか？」

ママがマキを抱えて報道陣や集まった人々の質問攻めから守る。パパが右手をあげて報道陣を制す。

「待ってください。とりあえず娘を家の中へ入れます。まずは、私たちが娘から話を聞きます。そのあとで皆さんに報告しますので……」

赤色灯を点灯させたパトカーがもう一台やってきて止まった。ドアが開く。

「どいて、どいて。ほら、どいて」

人々をかき分けて現れた山内巡査長と高下駄巡査の二人は、家の中に入ろうとしていたマキを見て声をあげた。

「おお、マキちゃん。無事だったか」

母親に抱かかえられて中へ入ろうとしていたマキは、振りむき、だいじょうぶだよ、と二人のおまわりさんにうなずいた。マキの笑顔を見てホッとしたのか、高下駄巡査は大きなため息をもらした。

「ああ……よかった」

群がる報道陣の中から、スマホを手にした記者が叫ぶ。

「犯人が自首したぞ！ たった今だ。ニュース速報に出た」

大きな声で、ニュース速報が読みあげられる。

「ただ今、速報が入りました。きょう、午後五時、郵便局を襲った強盗犯が、たった今、釜氷警察署に自首しました。犯人が連れ去った中学生は一緒ではありません。中学生の安否については、まだ情報が入っていません。新しい情報が入り次第お伝えします」

マキはママに連れられて家の中に入った。パパが外に残って、まわりの人々に対応している。疲れ果

てたマキは、居間のソファに倒れ込んで目をつむった。(ああ、眠い……)、意識が遠のき、テレビの音が…遠くから聞こえてくる。

「続報です。強盗犯に連れ去られた中学生は無事保護されたもようです。繰り返します。先ほど、郵便局強盗犯が警察署に自首しました。連れ去られた中学生は自力で家に戻ったもようです。お伝えします。人質の中学生は家に戻りました。繰り返します……」

(ああ、眠い。ふあァ……ああ……あしたの土曜、昼から……みんなが公園に集まるって……だから、マキも来いって、……ふあァ……久しぶりに、みんなで鬼ごっこでもするか……小学生に戻った気分で、ははは……ふあァ、眠い……)

---

釜北小学校 事件簿

---

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---